

『江湖風月集抄』研究ノート（一）

——龍門文庫・足利学校遺跡図書館所蔵本を中心に——

飯塚大 展

はじめに

本稿では、現在中世禅籍班で講読中の『江湖風月集略註』¹に対する比較検討の史料の一つとして、龍門文庫所蔵『江湖風月集抄』²（芳郷光隣講述、彭叔守仙増補）を取り上げ、更に五山における『江湖風月集』の受容について考察したいと思う。同様に、足利学校遺跡図書館所蔵『江湖風月集抄』（春浦宗熙会下の僧の抄出か）の史料紹介を中心に、本書は室町時代後期に活躍した春浦宗熙の抄出を含むものであることから、併せて大徳寺系（徹翁派下）の抄物の成立と受容について、その一端を明らかにしたいと思う。

一、龍門文庫所蔵『江湖風月集』について

五山における『江湖風月集』の受容について、龍門文庫所

蔵『江湖風月集抄』（以下龍門文庫本）を中心に考察してみたいと思う。

龍門文庫本には、以下の芳郷光隣識語があり、その成立の事情が分かる。

僕竊意、古宿編此集為後学之助者、寔不徒然也。所以者則、所頌之境界、大半本分・現成而易見、庸衲難咬嚼者、不過一二焉。然往々談於街説於巷者、小杜賦阿房之見解焉耳。惜乎、雖為博學多聞君子、不能密參、豈獲不誤後世也哉。僕嘗聞此講於吸松老人。爾來積而不手之者久之。頃者東山有一僧荐請講焉。仍隲渠於聞而録者、粗聞管見。庶幾後覽者、唾而裂之。吸松蓋聞諸勝剛和尚云、

永正十稔昭陽作噩仲春上休

愚陽光隣書于三聖文室。

僕竊に意らく、古宿の此の集を編み後学の助と爲るは、寔に徒然ならざるなり。所以いかなとなれば、頌する

所の境界、大半本分・現成にして見易く、庸衲の咬嚼し難きは一二に過ぎず。然るに、往々にして街に談じ巷に説けるは、小杜の阿房を賦するの見解のみ。惜しいかな、博学多聞の君子なりと雖も、密參を能くせずんば、豈に後世をを誤らせざることを獲んや。僕嘗て此の講を吸松老人に聞けり。爾來積きて之れを手にせざること久し。頃者東山の一僧有りて、苻りに講ぜんことを請う。仍つて向に聞けるを彙集して録するは、粗聞管見のみなり。庶幾わくは、後覽の者、唾して之れを裂け。吸松は蓋し諸れを勝剛和尚に聞くと云う。

永正十稔昭陽作噩仲春上休

愚陽光隣書于三聖丈室

（龍門文庫所蔵本奥書）

この識語によれば、芳郷光隣（？）一五三六）は、『江湖風月集』の講義を吸松老人（明之永誠）に聴聞したが、それ以降久しく手にすることは無かった。後に建仁寺の一僧が頻りに講義を懇請するので、粗聞管見ではあるが、それを開陳する。ちなみに明之はその講義を勝剛長柔（一四五六、臨濟宗聖一派）に聞いたのである。かくして、龍門文庫本の基となった芳郷光隣の『江湖風月集抄』は、永正十年（一五一三）に成立したことが解る。上記のことは本書の以下の記

事によっても確認できる。

①某謂、旧講、一二ノ句、現成、三四ノ句ハ、万里一條鉄トミラレタハ、面白ソ。明之云、此義勝剛ノ義也。

〔30〕、三八頁

②古抄又云、眠藏ノ之額也。但シ勝剛和尚ヨリ相傳テ、明之和尚講之義ニ、不レ取レ之。

〔95〕、一一八頁

③明之演ニ勝剛禾上講説云、冷泉ガ若シ行人ノ聴レ猿ヲ哀シム。断腸ノ涙ナラハ、如何ニ深キ冷泉ナリトモ、可乾也。巴峽ノ水、若シ行人ノ涙ナラハ、冷泉ヨリモ、一倍深キ淵ナリトモ、竭レ底ヲ乾クヘキ也。〔97〕、一二二頁

④明之自ニ勝剛和尚傳講レ之、眠藏ノ額ト云義、無レ之。

〔139〕、一六〇頁

（※）内の番号は筆者による偈頌の整理番号、頁数は『龍門文庫善本叢刊』第四卷の所載箇所を示す。以下同）
「某謂」として注解するのは芳郷光隣の説であり、「旧講」「古抄」に云うとして引用されるのは明之永誠の講義を指しており、更に明之は勝剛長柔の講説を相伝していることがわかる。

本書には、さらに彭叔守仙（二四九〇〜一五五五）の以下の識語がある。

①此兩帙一百五十丁鈔者、侍 芳卿師翁講筵之次、請以 膾寫矣。加之到有狐疑之處則、或引本證或加臆説、以解

消其瓦水者也。

于時永正十稔癸酉臘之十又六、於不二庵下怡雲東窓書之

野釈瓢閣山人二十四齡(印)

此の兩峽一百五十丁の鈔は、芳卿師翁の講筵に待するの次いで、請うて以て謄写す。加之孤疑しゆんぎの有る處に到る則んば、或いは本證を引き、或いは憶説を加えて、以て其の瓦水を解消せしものなり。

時に永正十稔己酉臘の十又六、不二庵下怡雲東窓にて之れを書す。

野釈瓢閣山人、二十四の齡

②斯江湖風月集二百六十一首、自永正十八歲辛巳八月十三日、至同十月初六日、首尾十七會、為大仙庵運仲乘公西堂於善惠境界講説焉

前真如彭叔叟守仙法齡三十二□

斯の江湖風月集二百六十一首は、永正十八歲辛巳八月十三日より同じく十月初六日に至るまで、首尾十七會、大仙庵運仲乘公西堂の為に、善惠境界に於いて講説す。

前の真如彭叔叟守仙、法齡三十二□

③自天文元壬辰仲冬初七、至天文二癸酉仲夏廿八日為藝西禪正豊梁首座講者十五會

瓢閣山人四十四齡(花押)

天文元壬辰仲冬初七より、天文二癸酉仲夏廿八日に至るまで、藝西禪正豊梁首座の為に講すること十五會。

瓢閣山人四十四齡(花押)

彭叔守仙は、①によれば、芳郷の『江湖風月集』の講演に待して、その講義録を請うて謄写した。更に自分が疑問に思つた点などは、その典拠を証し、自己の見解を呈示して疑問点の解消に努めた。それは、永正十年(一五一一)十二月十六日、彭叔、二十四歳のとき、増補『江湖風月集抄』が成立した。彭叔の説は以下のような形で提示される。

(イ) 飄云、僧問法眼曰、如何是曹源一滴水。眼曰、是曹源一滴水ト、答ト同シキ歟。(一四頁)

(ロ) 飄謂、一肩ニ擔ト云時ハ、衲衣ト云ヘケレトモ、袈裟ハ恰合ナリ。(二六頁)

(ハ) 飄案韻會稔字注曰、説文、穀熟曰、从禾念声。廣韻、年也。古人謂一年為一稔、取穀一熟也(二二頁)

②によれば、彭叔は増補『江湖風月集抄』をもとに、永正一八(一五二一)年八月一三日から同年一〇月六日に至る期間に、大仙庵居住の運仲乘西堂を發起人として、東福寺善惠軒において都合一七回の講義を行った。⁸⁾

③によれば、彭叔は更に天文元年(一五三二)十一月七日

より同二年五月二八日に至る期間に、藝□西禅正豊梁首座を發起人として、都合一五回の講義を行った。

このほか、識語には見えないが、天文丁未年に住持となつた能登の崇寿寺において六回の講義を行っている。上記の講義過程は本書の日程記事によつて確認できる。

二、龍門文庫本における引用諸説について

龍門文庫本の内容について、略述してみたい。先ずその引用諸説についてであるが、たとえば義堂周信(一三二五〜九一)の『空華日用工夫略集』が引用されている。

「日工集云、唐合祀山大帝ハ、乃廬山皈宗ノ土地神、大覚感夢、建仁寺以此為土地、張大帝也。事跡相似、勿濫之。

私按日工集二ハ、祀山大帝二ハ、……豈又日工集有胡乱ノ之説乎。(下略)」

〔89〕、一〇九頁〕

〔参考〕

建仁月心(慶圓) 來話、唐國祠山大帝乃廬山歸宗土地神、大覺禪師(蘭溪道隆) 感夢、示其日本有縁之意者三度、江東祠山府前有穴、深廣丈餘、每歲祭祀、飲食等物内其穴中、未嘗作堆、如消化者、謂之埋藏。或云、穴通南

海、々南雷州、每歲祭雷神以紙鼓、祭罷必黑雲垂下。有取紙鼓上者、皆奇事也。

〔空華日用工夫略集〕永徳元年(一三八二)五月七日条「これは、蘭溪道隆の説話の一つであり、建仁寺の土地神として祠山大帝がまつられる根據となつたものである。」

『江湖風月集』の内容理解について、その困難さを語るエピソードとして、義堂、大清宗涓(一三二一〜一三九一)、獨芳清曇(一三三九)の記事がある。

①義堂、貞和集、此濁港圖ノ頌ヲ載ラレタカ、五祖、六祖ニ衣ヲ傳テ、夜我ト送テ、船ヲコカレタ処ヲコソ、太清ノ不審ヲ、五祖ノ生レ云テサレタ処ヲコソ、作ラウスレト云テ、曇獨芳ニ問ハレタレハ、義堂モ不審サニ、唐人ニ問ハシマウタレハ、唐人モヨウ云ハヌト云ソ。其ハヘシテ不審モナイ。五祖、我カ生レテ弃ラレタ処マテコソ、六祖ヲ送テ行ツラウ。

〔256〕、濁港、二八七〜八頁〕

ちなみに義堂関連の記事に、『東山外集抄』『貞和集注』の引用が見られる。

①東山外集抄云、崇福悟明日、……〔33〕、四四頁〕
②瓢案印成西堂貞和集注、此頌注云、上方ハ乃光仏照嗣子、鉢朴翁也。〔56〕、六九頁〕

〔参考〕

(イ) ……平日著述者、有善福・建仁・南禪三會之語一卷、偈頌詩文若干卷、號空華外集、梅洲老人中岩月公嘗作叙并跋、撰集者、有古今雜集若干卷、東山空和尚外集抄十卷、禪儀外文抄十二卷、枯崖漫錄抄二卷、重編貞和類聚祖苑聯芳集十卷、日用工夫集四十八卷、今是集、畧而書焉。

〔空華日用工夫略集、嘉曆二年四月四日条〕

(ロ) 東山外集抄一冊、南伯西堂へ返之、

〔蕉軒日録、文明十七年四月廿一日条〕

(ハ) 又東山外集抄曰、我能々猶儂、又涌壁像。抄曰、作雲中涌出之像也。或曰、以機事作出入之形也。又出示ハ庵於天龍藏主乘弘語開山添削軸、此山和尚有跋、

…

〔臥雲日件録抜尤、六月九日条〕

雲章一慶(13) (一三八六〜一四六三) も、同時代に流布してゐたであろう、多くの「江湖集注」の中で可なる物は二三に過ぎないと言つてゐる。

(一) ○琉璃灯ハ棚 雲章云、江湖集注中、可者不過二三、瑠璃灯棚之解、甚不可也。或以琉璃作灯棚之義、可發一咲。琉璃即灯、々即琉璃也。清規曰、点セヨ琉璃者、即点灯也。所謂点茶・点湯之義也。琉璃ハ(此ノ義ニ)、

〔江湖風月集抄〕研究ノート (二) (飯塚)

灯蓋之義也。然則、置琉璃蓋灯於棚上也。或云、青色ノ絹ヲ以テ、竜ノ兒ハ、灯籠ヲハツタ中ニ、火ツトモスヲ云也。此義ハ時ハ、琉璃蓋ト云義ヲ、非ナリトス。種々ノ義アレトモ、不レ取レ之也。

〔1〕

このほかにも五山僧の諸説が引用されている。列挙すれば以下の通りである

〔古劍妙快の引用〕

①快古劍著語シテ云、幸自可憐生、汝好々看。

〔21〕、三〇頁〕

②快古劍在唐ノ之時、此ノ頌ハ難心得頌トテ、愠怒中ニ問ハレタレハ、悦喜シテ談セラレタト也。

〔71〕、八四頁〕

〔中岩円月説の引用〕

①妙喜開山仲岩云、頌ト云ハ、倒騎仏殿ナント、云、キコツナイ語ヲ作ソ、詩ハ秋雲秋水ナント云、細調和氣之語ヲ作ソト也。季弘ノ語□

〔序、一〇頁〕

〔性悔靈見(一三一五〜一三九六)説の引用〕

①性悔和尚北野天神贊云、若シ將ニ我涙比滄海ニ、々々、應ニ竭シテ底ツ乾ク。此頌ハ心ヲ用。

〔97〕聽猿、一二二頁〕

【参考】

又云、冷泉ノ水ヲ我泪ニセハ、冷泉ハ可レ竭ソ。巴峽ノ水ヲ我泪ニセハ、巴峽ノ水モ皆ニナラウス、ト云ソ。性悔、天神ノ賛曰、若將我泪比滄海、々應須竭底乾、ト作ラレタソ。此ノ頌ノ心ヲ、凡ソ知テソ、作ラレツラウ。ナニサマ冷泉——、此一句テハ心得ヌソ。

【襟帯集】(97) 聴猿

②見性悔モ渡唐^{シテ}、蒲龕^ヲトリテ来ルソ。

【(173)、一九九頁】

【汝川正三説の引用】

①……汝川和尚毎ニ言之。竜峯門下ニモ言之事也。

次に曹洞宗関連偈頌において、三位・五位説による解釈が行われていることを指摘したい。

(1) 若以曹洞下之義^ヲ、見之則、無月ハ、正位ニトリ、星斗ハ、偏位ニトルヘシ。雖然、臨濟宗ハ、是等ノ義、不可取也。某謂、一二ノ句ヲ、事相ノ上ニ見テ、三四句ヲ、現成ニ可レ見乎。

(29) ○銷^ス印^ヲ (故事見^ニ于前^ニ、張良カ、高祖ニイケンヲ云ヤウハ、印ヲ刻テ、六國ノ後^ヲ封シタラハ、八難アルヘシト云テ、八ヶ条ワルイ事ヲ、一々ニ奏スルホ

トニ、ソレニナリテ、ヤカテ印ヲ銷也。宗門ニテハ、掃蕩之義也。)

鉄鞋——、多年陣へ立テ、辛勞セシカ、一朝封^{ラレテ}功ニ、飯来て、穩坐スルハ、銷^レ印也。一對——、烏律々ハ、眼ノウロ々々トシタ事也。一義ニハ、眼睛ノ突出スル也。大事了畢(三七頁)ノ坐敷也。目^ニ看^レテ雲霄^ヲ、イタル処也。掛ハ、掛^レ眼^ヲ也。前ノ頌ニ、洞家ニ黒^ク正位ニトリ、白^クヲハ偏位ニトルホトニ、洞家ノ義ナラハ、月明ノ中ハ、偏位也。(此頌、烏津々ハ正位乎)。修行ノ方也ト云義アリ。某謂、此義、臨濟宗不可取之。

(31) ○送^ニ人^ノ之^ニ万^年ニ 虚堂本録ニハ、惠禪人之万年トアリ。台州天台縣平田寺ヲ、今ハ万年寺ト改メ、名クル也。

鼠人——錢筒ニ錢ヲ一文、ソバサマニ入ル、ホトニ、穴ヲアケテ置也。其ノ中ニ食物アルカト思テ、鼠カ入テ、不^レ得^レ出也。伎倆已窮ト云方語也。曹洞下ニ、大死底ノ人ト云者也。眼頭[○] 今日語テ見レハ、十年ハカリ修習參禪ハ 空^ク尽^シテ、何ノ蹤跡モ無也。此人ヲ、一二ノ句ニテ、美^ク云^フタソ。旧講、如此也。某謂、曹洞ニハ、鼠人ニ錢筒^ニヲ、大死底^ニ看^ヨカシ。臨濟宗カラ可^レ看^ナラハ、此僧随分遍參ヲモシタト思テ、住庵シタ、此間辛勞ヲシタリシ蹤跡ヲハ、眼中

ニ空尽シテイレトモ、未_レ得_レ活_{コトヲ}者ト、虚堂ハミラレ
タソ。而今又問——、コ、テコソ、此ノ僧ハ活シタレ。
山舎——、現成ノ句也。カウ見テコソ、此頌ヲ、大死底、
為_ニ却活底ト云事ハ、都合カアフヘケレ。

(69) ○帰鶴 此ノ頌ハ、曹洞宗、沙汰スル頌也、云々。

水邊——、冥々——、旧栖_ノ枝ニ、一日飛クタヒレテ、帰
テ欲_レ栖_ニ旧枝ニ也。冥々ハ、楊子ニ、鴻飛ニ冥々ニ云々。
コ、テハ、冥々ハ、松ノ高ヲ云ト云義アレトモ、鴻飛ニ
冥々ニノ語ヲ以テ見則、冥々ニ字ハ、ハルカニ高飛兒、ト
見テ、可_レ歟。縞衣——、縞衣ハ、白毛ヲ云也。不_レ知_レ重_{キコトヲ}
ハ、無心ノ義也。千尺——、本分ノ境界ニ到_レ処也。此頌ハ、
洞山ノ三路、鳥道・玄路・展手ヲ以テ、合テ見事ハ、無
用歟。曹洞宗ノ作タ頌テモアラハヤ、幸ニ臨濟宗ノ作タ
頌ヲ、サウ見テハ、無益也。楊子云、鴻飛冥々ニ、弋人
何_レ慕_ル。注云、慕ハ取也。鴻高飛ニ冥々ニ、雖弋人執繪
繪繖、何所施巧而取焉。今慕或為慕誤也。

(221) ○関_{フン}ニ宏智ノ語ヲ 宏智ハ、曹洞宗

金針——、金針ハ、サシアラワシタ方也、偏位也。不_レ露_ニ
鋒鏑_ヲハ、ミエヌ方也、正位也。故_ニ此一句ハ、偏位ノ中ニ
正位アリ。故ニ、偏中正也。曹洞、法門ニナルアイタ、如_レ

此見ソ。引_レ得_レ無_レ絲ノ玉線ヲ長シ、無_レ絲ハ、正位也。玉線ハ、
偏位也。此句ハ、正中編トミルヘシ。偏正回互也。自_ニ無
中ニ唱出_スホトニ、正中編也。化功形_ニ未_レ兆_ハ、正位也。
〔天地造化ノ功也〕。易、乾鑿度云、夫有形者、生於無形、
則乾坤安住而生、故有大易、有大初、有大始、有大素、
有大極。大易者、未見氣也。大初者、氣之初也。大始者、
形之初也。大素者、質之始也。氣具而未相離、謂之渾
沌、々々大極也。劫壺_ノ春信ハ、留_レ劫_ヲ於壺中ニ、是正位
也。看到_ニ化功形未_レ兆_ト云処ヲ、第四之句ニテ見セタソ。
覺花_ノ香ヲ、〔指語録〕覺_ニ花香_ト讀ハ、ヲトリタ点也。
某謂、劫壺之字、未穩、可考也。劫壺ハ、空劫ト云義
アリ。留_レ劫_ヲ於壺中ト云義アリ。未_レ見_ニ注解_ヲ。某謂壺
中日月長之義歟。

五位君臣ハ、人天眼目云、僧問曹山ニ五位君臣ノ旨訣ヲ、
山云、正位ハ即空界、本来無_レ物。偏位ハ即色界、有_ニ萬
形象_ニ。偏中正者、舍_レ事入_レ理。正中編者、背_レ理就_レ事。
兼帶_ハ者、冥_ニ應_ニ衆縁_ニ、不_レ墮_ニ諸有_ニ、非_レ染非_レ淨_ニ、非_レ
正非_レ偏、故_ニ曰_ニ虛玄大道、無_レ著_ノ真宗ト。從上ノ先德推_ニ
此ノ一位ヲ、最妙最玄トス。要當_ニ詳審_ニ辨明、君ヲ為_レ正位ト、
臣ヲ為_レ偏位ト。臣向_ハ君ニ、是偏中正。君ノ視_ハ臣ヲ、是正中
偏、君臣道合ハ、是兼帶ノ語ナリ。洞山ノ正中編、偏中正、
正中來、偏中至、兼中到ノ頌、見_レ于人天眼、僧宝傳同

也。

(31)では「鼠入_二錢筒_二」を「曹洞三位」説(自己・智不到・那辺)の自己(大死底)と、曹洞宗では解するが、臨済宗では異なるとしている。同句を、洞門抄物の一つである蓬左文庫所蔵『江湖風月集抄』¹⁴⁾では、

……此僧見持アリ。鼠——トハ、大事ノ公案、智不到カ、大死底カラ抛掛ケテ、向上_二道參スルヲモ敲落サレテ、伎倆コツキト窮也。

〔31〕送_三人之_三万年_二、抄物大系、三九頁〕と解しており、大事の公案として「曹洞三位」説を援用している。

『永平寺話頭総目録本参』(『永平寺史料全書』禅籍編 第二卷、No.42)によれば、

自己入頭入派、其数多也、雖然於当山者、祖師禪之入派、大入頭者、竹篋背触也、(中略)入頭者、或死活当頭入派、或大死底入派、或転凡入聖入派、或万機休罷入派、或心身脱落入派、何茂自己之入派也、能々諍訛於可見別者也、

とあり、「大死底」とは、「自己之入派」(自己の階梯の最初)を意味する。

(221)は、曹洞の法門(教義)であるから、五位説を以つて解するとしている。更にこの頃の注釈には、『人天眼目』

「曹山五位君臣旨訣」が引用されている。曹洞宗関係の語録及び頌古の解釈には、五位説が必須であったと思われる。否定的見解ではあるが、これらの引用は五位による解釈が五山と林下を問わず共通の認識として成立していたことを示すものである。そして、五位説解釈における最も重要な典籍が『人天眼目』であり、その書写と注釈は特に室町時代後期から江戸時代初頭にかけてやはり五山と林下を問わず盛んに行われた。

三、清拙正澄の『江湖風月集』の開板について

五山版は、既に南北朝時代に開版されており、東洋文庫所蔵本、成實堂文庫所蔵本等がある。大鑑禪師清拙正澄¹⁵⁾(一二七四〜一三三九)の跋によれば、

大鑑開『江湖集』板跋

宋末景定(理宗)・咸淳(度宗)之時、穿鑿過度、殊失醇厚之風。然有繩尺可為初學取則、然棄之、勿執其法。如世良匠、精妙入神、大功若拙、但信手方圓、不存規矩。其庶幾乎、學者宜自擇焉。

嘉曆三年戊辰、建酉下旬、清拙跋之。以示後世學者、不
知述作之意旨者。(七頁)

嘉曆三年(一三二八)に開版されて以降、五山において本

書は盛んに講義されることとなる。しかしながら、清拙はこの跋文に言うように、あくまで述作の意旨をわきまえない初学者のためのものであり、述作の方法（偈頌の作法）を学んだ上はそれを破棄することを勧めている。これは、清拙の本書に対する評価を示すものである。次に清拙における『江湖風月集』の位置づけについて考察してみたい。

(序) 大鑑、落^レ点^ト三十七首、義堂編祖苑聯芳、撰^ニ四十八首^ヲ於江湖集、中^ニ載^レ之。不二云、所撰如何。知大鑑・義堂用舍意、而可講江湖集也。

(207) ○送^ル人 參禪參学シニ行クヲ送ル也。此頌ハ、大鑑禪師落^ル点^トノ頌也。

(211) ○鳥窠 是大鑿禪師点落頌也。とあり、清拙が『江湖風月集』中の三七首に落点としたとされ、事実落点の頌二首が確認できる。

後述する大徳寺系の『江湖風月集抄』（春浦宗熙会下の僧の抄出か。以下『江湖風月集春浦抄』と仮称する）足利文庫所蔵本・御茶ノ水図書館成實堂文庫所蔵本）には、以下のように見える。

①頌之数凡二百六十三首、作者七十二人、建仁寺開山禅居開山大鑑禪師、此三十八首不加點、不論好悪、不審也。日本へハ、写本ハカリ渡ル。摺本ハ不^レ渡、注^ハ日本^ニデ、

『江湖風月集抄』研究ノート（一）（飯塚）

雅上司アツメラル。跋ハ、大鑑禪師書。

②大鑑書跋、其編中每首加^ル点、唯三十八首不加点、是更不知之。跋中有言、是為初学取則矣。後可棄之。（3ウ）

③慈視院義堂、貞和集、取此集中頌四十八首也。大鑑限三十六首、不加点、最不審也。

④大鑑禪師ハ、江湖集ノ頌ニ、点ヲ合^レレタソ。三十八首ニ点ヲ落^テ、悪イト云^レレタゾ。ベシタル事ハ無^ソ。心得ヘシ。（4ウ）

これによれば、清拙正澄は、『江湖風月集』所収二六三首のうち三八首を加^ル点しなかつた（認めなかつた）と言う。また、義堂周信は、『江湖風月集』から四八首を自ら編纂した『重編貞和類聚祖苑聯芳集』に採^ルび取^ッていたのであり、不二和尚岐陽方秀（一三六一〜一四二四）は、このことを承けて、清拙と義堂の意旨を汲^リんで『江湖風月集』の講義をすべ^キであるとする。

同様の記事は、成實堂文庫所蔵『襟帶集』¹⁷（永祿一二年（一五六九）文之玄昌写）にも、

大鑿落點三十七首、義堂編祖苑聯芳集、撰四十七首、出江湖集中載之。不二曰、所選如何。知大鑿・義堂用舍意而可講江湖集也。江湖集始盛行其世、中廢矣。日本人編入二首也。雖曰日本人頌、可足取則可取乎。日本板行本

削二首。大鑒意為後人警策也。大鑒晚年曰、棄此江湖集云々。此時祖師機縁、見義堂古今雜集。

とあり、清拙正澄による『江湖風月集』の位置づけは後世に影響を与えている。

次に『江湖風月集』の編者松坡憩庵主について考えてみた。

①松坡後跋

松坡前嘉熙（宋理宗）末、出峽、遍遊諸兄門庭、造詣深淵、嘗侍香冷泉、掌教竜淵。大（元歟）朝更化雪豆寓半簷、偶染風疾、無出世之意。養痾十餘年。以従前所聞見、尊宿雷霆於一世、唯々然陸沈於衆中者、掩息而不輝者、平時着述語、或二篇、或三篇、論編而成策、因之曰江湖集。如試大羹雉、可知鼎味。以此見松坡、雖忘江湖、猶未忘江湖也。戊子夏、千峯如碗謹跋。此戊子、蒙古、至元二十五年也。至元八、元ノ世宗ノ曆号也。（八頁）

②△江湖風月集

江湖集、大唐行脚僧、隨行次書之、夢岩之説也。蓋夢岩滅後、唐本来吾朝也。憩松坡（嗣無準）所集、碗千峯跋乃実也。大鑑禪師録、有開江湖集、板小跋。不_レ言憩松坡編。凡二百六十三首、此本二百六十一首、不載二首也。

松坡乃宋之末（小跋二見タリ）、元之始之人也。氣宇甚高、會宋運遷テ属ニ元朝ニ而隱居シマ、而編此ノ集也。大鑑、落_レスコト_二点_一三十七首、義堂編祖苑聯芳、撰_レシテ四十八首_一於江湖集中ニ載_レス之。不二云、所撰如何。知大鑑・義堂用舍意、而可講江湖集也。

江湖集、始盛行于世、中廢矣。日本人、編入二首故、雖曰日本人頌、可足取則可取乎。日本板行本削二首。大鑑意為後人警策也。大鑑晚年云、棄此江湖集、云々。此時祖師機縁、見古今雜集。

此頌者、宋末景定・咸淳之時分頌也。松源・大惠・無準派専多也。洞下少雜也。江湖風月義、下ニアリ。

①千峯如碗の跋によれば、松坡は宋末元初の人であり、この人によつて編集されたことがわかる。②によれば、唐本（中国刊本）がもたらされる以前、入元僧夢岩祖応は、『江湖集』は大唐行脚の僧によつて書写収集されたものだと言つたが、その後中国より刊本が伝来され、千峯の跋によつて松坡編集であることが分かつた。

所収の偈頌については、上述の大徳寺系の『江湖風月集抄』を勘案してみれば、室町時代中期から後期における『江湖風月集』の認識は以下の通りである。頌の数はすべて二百六十三首、その作者は七十二人に及び、頌者は宋末景定・咸淳の時の頌であり、作者は臨濟宗松源・大惠・無準派が専ら多く、

曹洞宗の作者はわずかである。日本へは写本だけが渡来したが、摺本はもたらされなかつた。ちなみに、日本人の偈頌が二首編入されており、その一首は林下道元派下の大智であつた。注釈は日本では、雅上司（未詳）が集められたのが初めだと言ふ。

四、五山における『江湖風月集』の講義について

『江湖風月集』が日本に伝えられたきわめて早い時期には、その中国刊本も輸入されず、写本で流布していた期間があり、編者も特定されていなかった。刊本が輸入され、松坡編集の『江湖風月集』として清拙正澄に依て開板されたが、その位置づけは初学者の偈頌作成の作法書であり、必ずしもその内容を肯定していたわけではなかつた。事実「落点」（読むに値しない）とした偈頌は三八（六・七）首があるとされるが、特定できるのは二首だけである。

義堂周信も『重編貞和類聚祖苑聯芳集』を編集する際には、『江湖風月集』から四八首を編入しているが、その判断基準がどこにあつたのかは判然としない。

しかしながら、既に龍門文庫蔵本に見たように、少なくとも東福寺莊嚴院派下においては、『江湖風月集』講義の伝統が息づいていた。事実室町時代中期以降、五山における『江

湖風月集』の講義は盛んに行われたことが確認できる。

先ず葵菴（江西龍派）の『江湖風月集』講義を取り上げる。『江湖風月集抄』（成實堂文庫所蔵本・足利学校所蔵本、春浦宗熙会下の僧の抄出か。以下『江湖風月集春浦抄』と仮称する）によれば、

別抄云、江湖私記、葵菴講師、夢粥發起、永享八年三月四日、始而講之。此頌凡二百六十三首、此内百首易解也。

別抄が引用する『江湖私記』によれば、葵菴（江西龍派）は、永享八年三月四日より初めて『江湖風月集』を講義したことが解る。ちなみに大徳寺系の『江湖風月集春浦抄』は、五山の注釈とは異なる性格を有する。その一つは五山僧に対する批判が垣間見える点にある。

明眼ノ人ノ言句ハ、イカ様ナル事ヲ云タリトモ、自然面目可レ備、佛祖以來、此道ヲ不レ心得者ヲハ、出家トハ云ワザルソ、文字ハカリアル人ハ、儒者チヤ、其上、宋朝以來ノ儒者ハ、東坡・山谷ヲハシメテ、參禪ヲシタ、文字ハカリノ僧ハ、惟肖・江西ヲハシメテ、儒者テコソアレ、禪僧テハナイ、

林下の僧から見れば、叢林（五山）の僧は文字（見解）ばかりの者であり、儒者と言うべきであり、禪僧では決してないとしているが、その典型として惟肖得嚴・江西龍派が挙げ

られている。

ちなみに、江西龍派の講義を最も好く伝えていた物の一つに、『頭書』江湖集夾山鈔(八巻八冊、万治二年(一六五九)刊)がある。この系統の本で、管見に入った物に、足利学校遺跡図書館蔵本(江戸時代初期写本、零本一冊)がある。前半の偈頌二二〇首を収載し、同所蔵『江湖風月集春浦抄』とは別本である。ほかに旧泰勝寺所蔵本(江戸時代前期写本カ、二冊)がある。

同系統の足利学校遺跡図書館蔵本、旧泰勝寺所蔵本には、『江湖集夾山鈔』とは異なる記事が見える。

江西、非ナリト読ム也。心宗和尚云、大樹和尚景川註二ハ、二重非也、ト云点好也。

(足利学校遺跡図書館蔵本、4ウ)

これによれば、この抄物は妙心寺派系統の伝承に属すると思われる。また『江湖集夾山鈔』においては、續翠(江西龍派)は曹洞の宗旨を依用して解釈することが多い。

故ニ不レ得テ止ムコトヲ 而到ニ句中ノ義ニ者ハ、儘引ニ續翠ノ講義ニ而載ニ此ノ註ニ。

とあるように、「句中」は語句の典拠・意義を指して言い、この点については全篇にわたって江西龍派(續翠)の注釈を引用したとする。

續翠ノ云、宋朝ヨリ已来、五家共ニ假ニ曹洞ノ位ニ説レト法ヲ惟レ

多シ、不レ可ニ稱計ニ、此ノ集中ニモ亦多シ其ノ例ニ。何ソ足ラレ疑ニ哉。

(巻一、2ウ)

また『江湖集夾山鈔』には、大智の和歌が引用されているが、その引用しているのも續翠(江西)である。

古抄ニ云、擗倒トハ者、迎接ノ之謂ニ也。續云、大智侍者、和歌ニ云、ヨイヨリモ烏ハ雪ニウツモレテ啼ク聲ニテゾ黒サヲハシル。欲レセハ參ニ此孤峰不白ノ古則ニ、則チ先ツ可レト參ニ此ノ歌ニ。

〔127〕雪樵。巻五、8オ〕

こういった点から、後世、續翠は曹洞宗の人であると解されている。京都大学文学部図書館所蔵『江湖風月集訓解添足』によれば、

○此ノ集雖有リト續翠所レ集註本ニ、是レ洞宗ノ人ニ故ニ多ク以テ洞上ノ舉唱ニ、下レ解ヲ云、此ノ句ハ師家自ニ正位ニ下ニ偏位ニ説法ニ之謂也。(下略)

(第一冊、4ウ)

とあり、無著道忠の『江湖風月集』講義を編纂増補した可山禅悦は、續翠所注本がしばしば曹洞宗の宗旨である五位説等をもつて解釈していることから、續翠を曹洞宗の人と見ていい。

勝剛長柔と交流のあった瑞溪周鳳には『江湖風月集』の講

義、或いはその講義録が存在したと推定する。『襟帯集』¹⁸には以下のように瑞溪周鳳説が引用されているからである。

①瑞溪云、或芒鞋——ハ、今石溪ノ処ヘ□タソ。故郷ニ皈ルニハ、過字カ好モナイ。故——、コレカラコソ、皈ヲ云ヘ。

②瑞溪云、虚空コソ、此拳頭ヨ。
〔46〕 道士帰川

③瑞溪曰、帰ト思ハカリテ、不知露重也。旧柳千尺寒松頂ニ帰テイバヤト思ウソ。本分ノ境界ニ至リタイソ。
〔47〕 水庵生縁
〔69〕 帰鶴

④瑞溪曰、只壁^ニ打着テ、雲ノ様ニシテ、観音ヲツクリツケタカ、ソコカラ湧出シタ羨ナソ。又ハ、蝸牛ノ跡トモ云也。

〔70〕 湧壁観音

⑤瑞溪曰、偏ハ、編也。僻ハ、僻也。織鞋編僻ト云ソ。編鞋方来^ニ人^ニ賣ルヲ、縁——、春風ソ、メイテコソ、編タ蒲鞋ヨ。是ヲバ、此侶テ誰カ着ルソ。誰カツセントヨム。是ヲ知音カナイ呈ニ、タレカツケウソナリ。

〔72〕 佛母道

⑥瑞溪曰、下火母ヲ生天カ報トモ云。万古——コソ、父母未生已前、本来ノ面目、一重向上ニモ見ルト云ソ。

『江湖風月集抄』研究ノート(一) (飯塚)

〔73〕 大義渡、頁
⑦却——、先生ハ宗旨ニソムイタゾ。トリノケテスレトモ、瑞溪曰、ヨノツ子ノ術者ハ、ハカリニカケテ知ル呈ニ、却テ許スト云ソ。常ニハカワリタ呈ニ、用処卒クト云ソ。用処別ナトト云ソ。大ナリト云ソ。

このほかにも、『蔭涼軒日録』や『臥雲日件録抜尤』にも『江湖風月集』の注釈が引用されている。¹⁹

五、足利学校遺跡図書館所藏『江湖風月集』について

既に足利学校遺跡図書館所藏『江湖風月集』の一本を『江湖風月集春浦抄』と仮称したが、その根拠について略説してみたい。春浦宗熙の記事は、以下のように見える。

①老宿云、夢宅ハ、三界無安、猶如火宅ノ文ヨリ出、老漢云、釈尊出世シタハ、此文ヲ為説ソ、只是ハ、垂手意也、参学ノメン々々心得ラレヨ、一期ハ夢中、生死不待人、急^ニ著^テ工夫ヲ悟徹セヨ、幾鐘声ト、孝者ニツ、カケテ問タソ、捨而孝者ヲハ、悟徹ノ境界ニ、イタラセフマテト、接スル者也、孝者モ、吾悟徹シタトハ、シルマイ、師家ヨリ看ル所アリ、今時皆悟徹モセイテ、悟徹シタト思^マ、元ヨリ古則ヲ多ク見タラハ、此外ハアルマ

イト思タハ、道理悟徹ノ境界ハ、可レ離ニ古則話頭一也、
皆理ノ上ヲ意得タルマテ、悟徹ノ境界ニイタリ得者ハ、
一人テモアレ、アリカタイ、悟徹ノ境界ニ不_レ至。大用
現前モセイテ、仏法シリダテハ、実ニ以可_レ笑事チヤ、我
ハナン則_レ看タ、ナン則_レ參タ、此古則ヲハ、人ハシルマイ
ナント、云テ、名利名文能作ニシテ瞞スル、無勿体也、
是ヲハ、子細ノ魔ト云事ヲ參タラハ、可知、佛モ説タ、
末世ニハ悟タト云者ハ、如_レ麻如_レ粟ニアルヘシ、又三四
句ノ一義ハ、三世諸佛、歴代祖師モ、トコニ今蹤跡カ残
テアルソ、鐘声ノ蹤跡ナキカコトシ、トコニ鐘ノ声カ残
テアルソ、ツキマメハ、アトカタチモナイソ、

本書の注釈形式は、(イ) 偈頌の題名に対する注釈、(ロ) 偈頌の句に対する注釈、(ハ) 「老宿」による全体の解釈である。ここでは、「老漢二」の引用があり、その傍注に春浦と書かれていることから、春浦宗熙の『江湖風月集』に関する解釈が引用されていることが確認できる。「老宿」と「老漢」との関係が判然としないが、老宿が老漢の先師に当たると推察し、仮に『江湖風月集春浦抄』と呼称した次第である。

②……(上略) 日本テモ、靈彦侍者ハ、下炬拈香ヲメサ
レズ、頌ナントモ、鼠骨ニハ、作ラレサルト也、平生云、
頌ナントハ、春甫ノカ本也、是ハ、正直ナル義、唐人モ、

春甫ノ頌冊ヲ見テ云ク、不凡作々々々ト、

五山においてその詩文の才を高く評価されている希世靈彦は、頌の手本とすべき物として春浦のそれを挙げてゐる。

ちなみに①の記事は、春浦の時代における公案參学の実態を物語る物であり、本書の注釈の姿勢を考える上でも注目すべきである。

『大徳寺夜話』²⁰には、

一、言外禾上、於萬法不侶話、大徹大悟、養叟禾上、於古帆未掛話悟徹、華叟禾上・春浦禾上、於拈華微笑話悟徹也。徹翁禾上、不與物拘、脱體現成云古則悟徹、此時開山付囑主丈・拂子・法衣等也。

右の記事は、徹翁義亭―言外宗忠―華叟宗曇―養叟宗頤―春浦宗熙という大徳寺主流派を形成した祖師たちが何れの公案で大悟したかを示しているものである。それでは、彼らは一休だけだけの数の公案に参じていたのであるうか。大徳寺北派の〈碧岩類則密參録〉には、

一、一休ハ、古則八十則ナラデハ參ゼズト云レタ、碧岩ヲハ、三十則參ジタ、其ノ支證ハ、人ニ碧岩三十則書テ出シタ。此内ヲ問ヘト也。養叟云、一休ノ風顛漢ヲハ不嫌、師家不_レ問ニ古則一、推著テ心得類ヲスルヲ嫌フタ也。

とあり、既に、養叟や一休の時代、師家とよばれるには、実に多くの公案に参じなければならなかったことが、想像でき

る。

○建長大應國師者、廿五歳入唐、随侍虚堂七年而嗣法、此年國師廿一歳ノ時也。

○開山大燈國師者、随侍大應國師五年、参学百八十則ニテ罷参、五十六歳ニテ遷化。

○靈山大現國師者、大燈参八十則了畢大事。

○養叟和尚者、華叟参八十則罷参。

○大摸者、参別傳、法ヲ嗣言外イへ共、言外ニハ、半句ヲモ不問。

○春作者、自云、纔四五参テ了畢ト、大聖國師ノ沙汰也。

とあり、これによれば、大燈國師は大応國師に百八十則を参じて了畢し、徹翁は大燈の八十則を参じ、養叟は華叟に八十則を参じて、いずれも大悟したという。

本書には春浦の師である養叟宗頤の記事が見える。

龐居士ハ、初至_レ石頭掩_レ却口_一セラレテ有省処、後至馬祖、於西江水処、大徹大悟。佛法ハ、至_三西江水_一、答話廣大_ニナリタト、養叟和尚云、悟_ニライテハ、西_一(1オ)江水問答ニハ、兩処不答話ト云々。先師ノ沙汰ニモ、到_ラ純一無雜境界_一、此答話ハエセマイ。関山派ノハ、下語・弁相違也。

養叟による馬祖と龐居士との西江水の公案の記事が見える

が、これは初学者に対して提示される公案の一つであり、養叟が頻々として用いる物であった。このほかにも『大德寺夜話』や大德寺系統の抄物に見える記事(祖師のエピソード)と共通する物がある。

大德寺開山大燈國師(宗峰妙超)は、頌によつてその人の境界、明眼不明眼(眞の悟りを得ているかどうか)を知ることができるとしている

①今皆頌トイヘハ、目口ヲハタケテ、ヲソロシサウニ作ト思フ。是ハ、大ニイワレサル事也。詩コソ頌ヨ、頌コソ詩ヨ。風・賦・比・興・雅・頌ヨリ出ル語ハ、皆同_シ事也。大灯云、柳緑花紅_ト作リタリトモ、明眼ノ者ツクリタラハ、頌チヤ。八角磨盤空裡走_ト作リタリトモ、不明眼ノ者作リタラハ、頌テハアルマイ。サル程、頌_ヲ作事大事也。古人皆_レ頌、明眼不明眼ヲシル。

②又、以_レ頌明眼不明眼ヲシル證抛_ニハ、六祖神秀之偈、機縁可引。日本テハ、藝州ノ慈休上司頌、同人訪寂寥、通霄對明月、一句合頭語、万劫繫驢橛。大燈國師云、慈休上司ハ、目クラカト思タレハ、明眼ノ者テアツタケルト、是モ以_レ頌知_レ明眼。同人ハ、知音之謂、善知識ト云モ、善友之義、人皆知音簡要チヤ。月ヲ見テ心得テ、合頭シタル語ヲ、向上ノ眼カラ見レハ、繫驢繫_ル。一義ニハ、用テ云タ。合頭シタル語ヲ、万劫マテ用_イタ。師

又云、明眼ノ人ハ、念佛ヲ申タリトモ、真実ノ佛法也。目クラハ、直指人心、見性成佛ト云タリトモ、佛法テハアルマイ。教云、一失人心、万劫不復。教者ノ心得ト、禪ノ心得トカワル。教者ハ、一ヒ人身ヲ失スレハ、万劫千聖モ難ク受_レ人身_ニ、禪ノ用_ヒハ、一失人身トハ、截断也。截断シタレハ、万劫ニモ輪廻セスト、教者ノ心得タ用_ニ、受人身輪廻シタハ、モツケソ。故人皆江湖兄弟ト云ハ、參禪ヲトロリトシテ、頌ナントラモ、(2才)能クツクルヲコソ云タレ。錢タニアレハ、誰ヲモ兄弟ト云、ヲカシキ事チヤ。

このような林下の頌に対する位置づけは、五山のそれとは異なる。詩と頌との違いについて、龍門文庫蔵本には以下のように見える。

凡頌ト云ハ、理事不_レ相應、不_レ可_レ叶也。頌ヲ兩行ノ繩ヲ打_レ二譬_ル事ハ、カタ々々ツリニシテハ、悪キ者也。理事ト事トヲ、マツ同ヤウニ、可_レ作也。理トハ、那一著也。事トハ、故事機縁也。(事相之上ノ事也)。

頌ハ、擬_ニ于詩風賦比興雅頌_ニ。毛詩序云、頌者、美_ニ盛徳之形容_ニ、以_ニ其成功_ニ、告_ニ於神明_ニ者也。吾宗ニテハ、擬_ニ其言_ニ、頌_ニ出本分_ノ之自己_ヲ之義也。教_ニ、祇夜ト云ハ、重頌ト翻ス。伽陀ヲハ、孤起偈ト翻ス。婆娑・俱舍等ノ頌ノ義、異趣雖_レトモ異、不_レ可_レ不_レ并_レ案_レ也。詩ト、頌ト

ノカワリ、見_ニ于北磻跋_ニ。妙喜開山仲岩云、頌ト云ハ、倒騎佛殿ナント、云、キコツナイ語ヲ作ソ、詩ハ、秋雲・秋水ナント云、細調和氣之語ヲ作ソ、ト也。(季弘ノ語也)夢岩云、頌・詩ハ、ナリ・カ・リニハ、ヨルマイ、意趣カ、アルヘキソ、ト也。此ノ義可也。イカニ恋ノ詩ノヤウニ作トモ、意趣簡要也。(十頁)夢岩和尚頌_ニスル_レ伝灯千七百則_ヲ偈_ノ序云、其末流甚者、聞_レ云_ニ秋雲秋水共依_レ々_ト、則_レ曰_レ此_レ詩也。聞_レ云_ニ倒騎_ニ二佛殿_ニ上_レ天台_ニ、則曰_レ此_レ頌_ヲリト也。欲_レトモ_レ不_レコト_ヲ笑_ニ而得_レシヤ乎。其_レ内_ニ無_レ得_レ補_ニ於吾道之萬_一耶、云々。

これによれば、頌は理事相応すべき物であり、理とは那一著(宗旨の極則)を、また事とは故事機縁(仏祖の悟りの機縁)をさす。頌は、毛詩の詩風・賦・比・興・雅・頌に擬せられる物であり、宗門では、自分の自己を頌出する義であると定義している。『江湖風月集春浦抄』大燈説と厳しく対立するのは、季弘が引用する中岩円月の説であり、頌とは、倒騎仏殿杯のような無骨な語を用いて作る物であり、詩は秋雲秋水などのような細やかで柔和な語を用いる物であるとしている。これが五山一般の認識かどうかは、これも亦た疑問であり、事実この文に続けて、夢岩祖心の中岩円月説を全否定している一文を引用していることからわかる。しかしなが

ら、頌は作者の器量を如実に表すものだと考へては、必ずしも五山の説には明らかではない。それは、入室參禪し、悟りを開いた者においては、語句の洗練、典拠の的確さと言つたことからは自由であると考へる林下の禪者の志向性を示すものであり、文字言句に拘泥する五山僧に対する一つの自負であり、氣負いであるかもしれない。それはしばしばコンプレックスの裏返しでもあつた。一方で五山との交流を進め、相対的に地位を向上させつつあつた大徳寺派（徹翁派下）・妙心寺派（関山派下）の教学にも一定の形式を整へつつあつた。しかしその担い手となつたのは、たとえば大徳寺の主流派を形成した養叟―春浦―実伝が五山での修学を経てきてゐるよう、養叟とは法の兄弟に当たる一休宗純も亦た五山の僧として出発してゐる。大徳寺派（徹翁派下）・妙心寺派（関山派下）が京都に位置すると言ふ特殊性は注目しなればならない。

まとめにかえて

今後、足利学校遺跡図書館所蔵『江湖風月集春浦抄』の翻刻を企図してゐる。それは林下における『江湖風月集』の注釈が、東陽英朝が注釈を加へた『新編江湖風月集略注』をもつて専ら語られる傾向があることに對する疑問から發してい

る。同様に五山における『江湖風月集』の講義内容と林下のそれとを比較したいと考へてゐる。また、五山と林下との二重嗣法を特徴とする幻住派が林下の教学を積極的に受容してゐる点に注目したい。足利学校遺跡図書館蔵本の別本が成實堂文庫に二部所蔵されており、その書写を行ったのが雲如妙意であつたことと、足利学校自体、その庠主の法系が室町時代末期から江戸時代初頭にかけて幻住派に属することなどが一つの指標となり得る。

幻住派による大徳寺派系語録抄の抄出（引用）事例としては、旧洞春寺所蔵現尊經閣文庫所蔵『臨濟録抄』、駒澤大学図書館蔵『臨濟録養叟宗頤抄』（同系統の諸本に叡山文庫所蔵本、足利学校遺跡図書館所蔵本）、松ヶ岡文庫所蔵『臨濟録鶴隱周音抄』、同文庫所蔵古帆周信抄出密參録各種、足利学校遺跡図書館所蔵密參録等を挙げることができる。ちなみに、駒澤大学図書館所蔵『浮木集』（同系統写本に足利学校遺跡図書館所蔵本あり）と、林下曹洞宗道元派下の切紙史料との影響関係は注目すべきである。

ちなみに雲如妙（梵）意は、幼にして歸源庵の徒であり、奇文禪才に養育されたが、中年、佛日庵に移り、鶴隱周音に隨侍して、夢窗派の人となつた。後に龍派禪珠のあとをついで、歸源庵に住した。

注

- (1) 芳澤勝弘編注『江湖風月集訳注』解説(禪文化研究所、二〇〇三年刊)
柳田聖山・椎名宏雄共編『禪学典籍叢刊』第11巻、柳田解説(臨川書房、二〇〇〇年刊)
- (2) 川瀬一馬監修『龍門文庫善本叢刊』第四巻『江湖風月集抄』・『百丈清規抄』(一九八五年刊)
併せて、京都大学付属函書館所蔵本を参照した。新潟大学図書館所蔵本(零本)がある(筆者未見)
- (3) 芳卿光隣は、月舟寿桂(？)一五三三(著『幻雲稿』)によれば、壮年の頃足利学校に遊学していたことが知られている。彭叔守仙の師である自悦守澤(一四四四〜一五二〇)の講義を芳卿が聞き書きした『六物図抄』(芳卿自筆本、壽岳章子氏旧蔵)があり、学芸における自悦と芳卿との師弟関係が伺える。また『東京帝国大学図書館所蔵善慧軒集書目録』によれば、永正二年(一五一五)自悦は芳卿の為に『円覚了義撮意』を講じており、彭叔はその抄出を行っている。同年、彭叔は芳卿から『三体詩』の手解きを受け、その秘蔵本を書写している。また、芳卿の手沢本が比較的多く知られている。両足院所蔵『勅規桃源鈔』(四冊、明応五年書写力、以下いずれも積翠軒文庫旧蔵本)、『虎丘和尚語録』(貞治七年刊)、『應庵和尚語録』(応安三年刊)、『佛鑑禪師語録』(応安三年刊)、『斷橋和尚語録』(南北朝期刊本)等がある。
- (4) 明之永誠は、虎関師練——性海靈見——明江聖悟——中川永源——嚴陽聖香——旭昇慧桑——東明慧旭——明之永誠と次第する、聖一派三聖門派に属する。龍門文庫本に見るように勝剛長柔に学芸を師事したことが知られる。明之は性海靈見(一三二五〜一三九六)の行実(『性海靈見和尚行實』)
- (5) 勝剛長柔は、『五山禪僧傳記集成』によれば、勝剛長柔は臨濟宗聖一派、佩弦老人とも号する。石見の人、大内氏の出自。東福寺莊嚴門派、傳宗長派の法嗣。嘗て建仁寺靈泉院續翠軒に江西龍派に随侍して外典の講を聞き、その抄録が多くあった。とくに瑞溪周鳳との交友が厚く、その抄録を借覽して抄出し、『梅野的問』を編んだという。宝徳二年(一四五〇)正月には、東福寺(五山)(第百四十七世)に住して居る。しかしその年冬には石見東光寺に引退し、閉居した。康正二年(一四五六)(二)に十五日『五山歴代』、同寺に示寂した。ちなみに、勝剛と交流のあった江西龍派、瑞溪周鳳は、いずれも『江湖風月集』を講義している。また朝之慧鳳(一四一四〜寛正年中寂カ)は、勝剛長柔の請に応じて、永享二年から長祿二年にかけて『勅修百丈清規』を講じている。建仁寺両足院所蔵『勅規桃源鈔』(四冊、明応五年写力)は、芳郷光隣手沢本であり、長期にわたって校正の筆を入れている。
- (6) 今泉淑夫『彭叔守仙禅師』(文藝春秋企画出版部、二〇〇五年刊)
運仲乘公西堂とは、運仲惠籌西堂(桂昌門派、竺峰恵心法嗣)のことである。東福寺靈雲院蔵『日用規範抄』の奥書によれば、
為運仲友人之發起講之者、一編三會、于時永正十五戊寅九月廿七日也。善惠境界周仙廿九歳志。
とあり、彭叔は運籌西堂のために、三度にわたって『日用清規』を講じている。因みに周仙は意足軒不琢に師事し、夢窓
- (7) 勝剛長柔稿(所収)を撰述している。また、幼少の時、邦良心王(一三〇〇〜二六)を祖とする木寺宮の養子となつたと言ふ。

派に属していた頃の法諱とされる。また、『日用規範抄』によれば、

為梅湖林首座講者二会、天文三甲午臘之十三、仙也四十五齡

とあり、天文三年（一五三四）、彭叔は運仲の法嗣である梅湖桂林首座の為に『日用清規』を講じている。

(8) ①第一講了、永正十八年辛巳八月十三 為運仲西堂發起講焉。〔17〕

②第一講了、為桂梁首座講之。天文元壬辰十一月七日。〔19〕

③於登之崇壽寺為淳□藏□ 第一講了 天文丁未仲冬旬三〔14〕、一二頁

④第二講□〔22〕、三一頁

⑤第二講辰十一月廿日〔27〕、三六頁

⑥丁未仲冬十九於登第二講了〔32〕、四一頁

⑦第三講了〔38〕、四九頁

⑧丁未仲冬念七於登州第三講了〔52〕、六四頁

⑨第四講了〔56〕、六七頁

⑩第四講□臘十三〔58〕、七一頁

⑪第五講了〔68〕、八二頁

⑫第五講了、天文二癸巳二月十八日〔八八頁〕

⑬第六講了。〔85〕、一〇一頁

⑭第六講了、癸巳二月廿二日〔90〕、一一四頁

⑮於登第五講了、未臘七〔90〕、一一四頁

⑯第七講了。〔97〕、一二二頁

⑰第七講了、癸巳二月廿九〔109〕、一三六頁

⑱於登州第六講了、臘十二〔109〕、一三六頁

⑳第八講了。〔112〕、一三八頁

⑲第九講了。〔125〕、一五〇頁

⑳第八講了、已三月六日。〔131〕、一五四頁

㉑第十度講了〔141〕、一六二頁

㉒第九講了、已三月十日。〔152〕、一七〇頁

㉓第十一度講了〔159〕、一七六頁

㉔第十講了、已三月廿三〔172〕、一九九頁

㉕第十二度講了。〔176〕、二〇三頁

㉖第十三度講了〔188〕、二一八頁

㉗第十一講了、已四月朔。〔191〕、二二二頁

㉘第十四度講了。〔203〕、二三三頁

㉙第十二講癸巳、五月十二〔211〕、二四一頁

㉚第十五度講了〔223〕、二五三頁

㉛第十三講、五月十八日〔229〕、二六一頁

㉜第十六度講畢矣。〔243〕、二七七頁

㉝第十四講了、已五月廿二。〔249〕、二八二頁

㉞第十七會講了〔263〕、二九八頁

㉟第十五講了、天文二癸巳五月廿八日〔263〕、二九八頁

(9) 本文中に以下の注記が見える。

第一講了、為桂梁首座講之。天文元壬辰十一月七日。

第十五講了、天文二癸巳五月廿八日 〔10〕、一九頁

彭叔は、安芸西禪寺の僧との交流を盛んに行っているが、

これは西禪寺が東福寺桂昌門派と密接な関係にあったからである。例えば、天文三年（一五三四）閏正月、彭叔は上述の

梅湖桂林首座と共に安芸西禪寺の僧文岫源梁の送行に際して

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

餞の詩を作っている。文岫は、中国地方群雄の一人、周防の

吉川元長と関係の深かったことが知られており(『西禪永興南寺旧藏文書』(『吉川家文書別集』)、また西禪寺は「慧日山東福寺末寺簿」^{〔109〕}「安藝州」条に「^{〔西條小藏山西禪寺〕}開山翔天驪禪師」と見える。文岫は、翔天源驪―惟孝禪孝―明文慧聰―文岫と次第する東福寺桂昌門派に属していたのである。因みに文岫は享祿五年に上洛し東福寺桂昌庵に掛錫しており、天文二年冬には万寿寺に於いて兼弘を行っており、同年一〇月一七日に、石州安国寺、城州真如寺の公帖頒布されている(『鑑川家文書』第一集)。また『猶如昨夢』巻下「和仲字銘」によれば、文岫はまた天文十三年(一五四四)十一月、上洛して門人惠東侍者の為に字号を求めている。因みに和仲惠東も西禪寺の住持となっている。「藝」西禪正豊梁首座」と「桂梁首座」は同一人物と思われるが、未だ判然としない。

(10) 天文一六年(一五四七)に下向して居住した能登の崇寿寺において六回の講義日程は以下の通りである。

於登之崇寿寺為淳公藏主、第一講了、天文丁未仲冬旬三。

丁未仲冬十九於登、第二講了。
〔14〕、〔一二頁〕

丁未仲冬念七於登州、第三講了。
〔32〕、〔四一頁〕

於登臘二第四講了。
〔52〕、〔六四頁〕

於登第五講了、未臘七。
〔73〕、〔八九頁〕

於登州第六講了、臘十二。
〔90〕、〔一〇四頁〕

淳公藏主とは、天質淳公藏主のことであり、能登畠山氏被官三宅氏の出自で、熊木定林寺、崇寿寺に関係があった。因みに彭叔の夢窓派時代の師不琢も、「先の意足軒不琢師翁は、三宅氏の夢窓にして、正覚国師(夢窓疎石)の雲耳なり」(『猶如昨夢』巻上)とあるように、三宅氏出身であった。『鉄酸館』巻下によれば、彭叔は天文一六年(一五四七)五月、

京の兵乱を逃れて能登に下向している。天質はこれより先に上洛し、東福寺に掛搭して、彭叔に随侍すること三年に及んだという。また『猶如昨夢』巻中「書天質藏主古文真宝後」(天文一七年三月五日)によれば、天質は彭叔の秘藏本『古文真宝後集』を書写し、その跋を彭叔に求めている。能登の崇寿寺、定林寺は、東福寺栗棘庵の末寺であり、その人的交流は盛んであったことが彭叔守仙の『猶如昨夢』『鉄酸館』によって確認できる。因みに、彭叔は生涯のうち三度能登に下向している。

(11) 『大鑑清規』には、「二月八日大帝誕生規式」に、「祠山大帝一寺護持之主」とあり、同じく「大帝誕生看經」によれば、「山門」二月初八日、恭遇當寺護法大宋國祠山正順賞會昭顯威德聖烈大帝聖誕良辰」とある。毎年二月八日が祠山大帝の諱辰であり、法要が営まれた。蘭溪感夢の説話については、「謹榜元號祠山正順威德聖烈大帝、洪名元朝改、称祠山正祐昌福宗仁真君。帰宗寺裏、請作土地神。本社正在江東廣德軍、埋藏靈驗天下聞、二月八日誕生辰、與大覺禪師、爲有因緣、不易言陳、畢竟無異事、要在弘法度入。祠山處名、大帝官名」と見えるのみである。ほかに、『諸回向清規』『禪林象器箋』にその記載が見える。

大石守雄「大鑑清規の研究」(『禅学研究』第45号、一九五四・二)

尾崎正善「翻刻・聴松院藏『大鑑清規』」(『鶴見大学仏文化研究所紀要』第5号、二〇〇〇・四)

(12) 義堂周信は『東山空和尚外集抄』十巻を著したことが知られる。本書については、所在未詳であり、同書そのものかは判然としないが、龍門文庫本にはその引用が見える。ちなみに建仁寺兩足院にはその漢文鈔が二部現存する。同じく義堂

が選述した『重編貞和類聚祖苑聯芳集』十巻に對する印成西堂なる者の注釈を彭叔守仙が引用している。本書については、足利學校遺跡図書館藏本（零本、漢文鈔）が現存する。

①東山外集抄云、崇福悟明曰……〔33〕、四四頁

②瓢案印成西堂貞和集注、此頌注云、上方ハ乃光弘照嗣子、銛朴翁也。〔56〕、六九頁

《参考》

(イ)……平日著述者、有善福・建仁・南禅三會之語一卷、偈頌詩文若干卷、號空華外集、梅洲老人中岩月公嘗作叙并跋、撰集者、有古今雜集若干卷、東山空和尚外集抄十卷、禪儀外文抄十二卷、枯崖漫錄抄二卷、重編貞和類聚祖苑聯芳集十卷、日用工夫集四十八卷、今是集、畧而書焉。

〔空華日用工夫略集、嘉曆二年四月四日条〕
〔口〕東山外集抄一冊、南伯西堂へ返之、

〔蕉野日録、文明十七年四月廿一日条〕
(ハ)又東山外集抄曰、我能々猶儂、又涌壁像。抄曰、作雲中涌出之像也。或曰、以機事作出入之形也。又出示り庵於天龍藏主乘弘語開山添削軸、此山和尚有跋、

〔臥雲日件録抜、六月九日条〕
(13) 一条經嗣の子、兼良の兄。岐陽方秀に学芸を師事し、後に奇山円然に拜塔嗣法した。東福寺（第一三二世）、南禅寺（第一七二世）に歷住した。清規に詳しく、特に『勅脩百丈清規』の講義は、桃源瑞仙が抄録し、『勅脩百丈清規雲桃抄』として伝わる。

(14) 中田祝夫編、西田絢子解題『抄物大系』『江湖風月集抄』（勉誠社、一九七七年刊）

(15) 清拙正澄（大鑑禪師）は、破菴派大鑑派下に属し、愚極至慧の法嗣。出身は福州漣江の人で、俗は劉氏で、月江正印の

『江湖風月集抄』研究ノート（二）（飯塚）

俗縁の弟に当たる。嘉曆元年（一三二六）に五三歳で来朝し、北条高時に迎えられて建長寺の第二十二世となり、のち円覚寺や南禅寺を歴住し、元弘三年（一三三三）には建仁寺第二十三世を嗣いだ。古林清茂・月江等と元末禅林史上、偈頌作成の盛行を齎した人物とされる。著作に『清拙和尚語録』二卷、『大鑑清規』一卷がある。

(16) 聖一派。靈源性浚の法嗣。法諱は初め道秀（二時生秀）、のちに方秀と改めた。道号は、岐陽（初め岐山）、地名は琴川。出身は讃岐の人、俗姓は佐伯氏。讃岐道福寺・普門寺・東福寺・阿波の慈圓寺・天龍寺に住す。著作に『不二遺稿』三巻の他に、禅籍抄物としては『碧巖録不二抄』『中峰廣録不二抄』『禪林僧寶傳抄』等がある。特に『碧巖録不二抄』は五山・林下を問わず、後の『碧巖録抄』をはじめ多くの禅籍抄物に影響を与えた。

(17) 芳澤勝弘『江湖風月集訳注』によれば、聖澤院には『江湖風月集略註』二部が所蔵されており、これらは大仙寺旧蔵本であるという。そのうちの一本は虚庵玄密が用いた『江湖風月集』講義本であることが、以下の識語によって確認できる。

永祿九年（一五六六）丙寅之夏中、于隻日子双日、濃之遠山深處講了之。傍取續翠江西大禪佛廳記、而抄入冊中、以為諸助矣。字經三写、烏焉為馬者、不亦在茲乎哉。于時暮齡六十有五也。

ここでは、江西龍派の説が『江湖風月集略註』に抄入（増補）されたことがわかる。

(18) 『成實堂叢書』襟帯集（民友社、一九一八年刊）

柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第11巻、（臨川書店、二〇〇〇年刊）

(19) いずれも寛正四年の記事であり、当時流通していた『江湖風月集』の注釈書(漢文鈔か)の一端を知ることにはできる。

① 錦鏡事、漢有之否。以三壽阿有御尋。江湖集有錦鏡池頌。注云、雪竇境致也。春花秋葉、隨映二彼池、故云錦鏡池。即書之以呈。希有二云々、奇哉々々。

〔蔭涼軒日録〕寛正四年九月二十九日条

《参考》

錦鏡池(雪竇)之境致也。春花秋葉、隨時映水、故云錦鏡池。々々有飛雪亭(下略)。

〔江湖風月集略註〕

② 江湖集抄一覽、瑠璃灯籠頌、玉龍、抄曰、灯籠文也。

又曰、以瑠璃作之、自口出灯心。又大雅松風句曰、毛詩大雅篇、与松風无如此之声。

劫壺、抄曰、留劫於中也。

板齒生毛、抄曰、不思議奇特衲子也。

平沙落雁図曰、以此送行頌、為落雁図也。

○磨推西北碓東南、抄曰、磨上也。碓也、盤也。此義未解。

〔臥雲日件録抜尤〕寛正四年六月九日条

(20) 龍谷大学図書館所蔵『大徳寺夜話』は、大徳寺の古岳宗巨(一四六五〜一五四八)が、その師実伝宗真(春浦宗熙の法嗣、一四三四〜一五〇七)をはじめとする諸先輩から見聞した口傳の記録。別本に吉川泰雄氏所蔵『眼裡砂』がある。

(21) 円覚寺内歸源庵及び佛日庵における幻住派の晋住について、玉村竹二氏は以下のように指摘する。

三伯玄伊は雲如妙意、文宗法彦、龍派玄珠に傳法してゐる。雲如妙意梵意は、佛日庵の鶴隱周音の徒で、夢窓派方外宏遠下の人であるが、この印證をうけてのち歸源庵に入住し、幻住派を同庵の法系に導入した。その印證をうけたも

のに、古帆周信がある。古帆は夢窓派方外下の人仲住周觀の徒であるが、雲如より印可を受け、幻住派を黃梅院に導入した。古帆より印證をうけたものに、歸源庵の謹中是愿と伊豆國清寺高岩院の玄旨妙義、佛日庵の天叔周聰がある。伊豆國清寺一派は、最も幻住派の傳法を嚴重に勵行して今日に及んでゐるが、その根源は、玄旨妙義に在るといふべきである。雲如妙意の關係史料に以下のものがある。

① 瑞泉寺所蔵『三伯和尚行迹』

師諱玄伊、野州喜連川之産也、姓鳥海、喜連川左兵衛家臣也。裔也、師於古河永仙院、隨季龍周興和尚薙髮、於天龍取拂、賜禪興帖、尋住相圓覺、曾到洛之天龍寺之妙智院、參三章玄彰和尚、終受三章之深旨、得々歸、今流在關左、受業嫡子天甫碩圓、嗣法的孫雲如妙意・龍派玄珠・文宗法彦、慶長十八癸丑十二月五日、壽七十五而於永仙寂、三伯和尚曰、汝天甫、上京洛、別可嗣法去、今東關法脈中絶、吾與子兩派、要流布東關、故天甫嗣法宗伯碩興、依斯二法、彌綸五岳云云、

此意天倫和尚、傳語于余碩剛

享保十七年壬子九月穀旦 喝禪碩剛記、

② 足利学校遺跡図書館所蔵『寒松稿』五

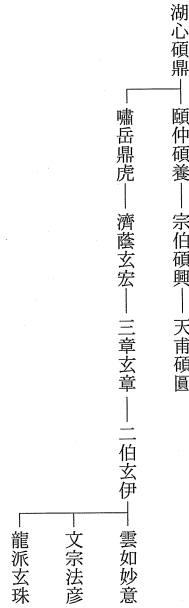
呈雲如和尚詩并序

昔年永祿庚申(一五六〇)之春、武相之江山、盡入戰國、南矛北戟、不得已者向五年、甲子之秋、屬昇平無事之日、余自武來而拜先師於好雪室中、先師于時七十二歲也、雲如禪翁侍側、歲十四也、今茲元和庚申(一六二〇)之冬、余偶然爲客、暫寓好雪室中、余亦七十二歲也、愿少年侍側、是亦歲十四也、甚希有々々々、少年他後七十二歲之時、有十四歲之青童而侍此室、必然之理也、豈可聽水乎、而後

瓜瓞綿々、累世紹續、無令斷舌、聊作小詩、呈禪翁、以
 令少年記之、至祝々々、
 緑髮禪翁會侍室、先師七十二春秋、少年同甲吾同甲、同甲
 相期又白頭、

③ 幻住派法系

寒松禿翁禪珠南模、



資料篇【足利学校遺跡図書館所蔵『江湖風月集抄』】

江湖風月集 懋松坡ノ集ラレタ。松坡ハ、林際宗也。
 圓悟勤、虎丘陵、密菴傑、無準範、懋松坡、々々、終不出世、
 早逝シテアルホトニ、好イ僧テハアリタ。序跋ハ、不書。
 頌之數凡二百六十三首、作者七十二人、建仁寺開山禪居開山
 大鑑禪師、此三十八首不加點、不論好惡、不審也。日本へハ、
 写本ハカリ渡ル。摺本ハ不_レ渡、注_レ日本デ、雅上司アツメラ

『江湖風月集抄』研究ノート(一)(飯塚)

ル。跋ハ、大鑑禪師書。

江湖ハ、江西・湖南也。江西ニハ、馬祖道一_レ旺化、湖南ニハ、
 石頭遷旺化、其間ヲ參学僧漂泊シテ、參禪ノスキニ、嘯_レ月
 吟_レ風而頌_レヲ作故ニ江湖風月_ト名。

六祖、南岳懷讓、馬祖道一、百丈懷海、黃蘗希運、臨濟義玄、青原行
 思、石頭希迁、栗山嚴惟、雲居曇晟、洞山良价、曹山本寂

龐居士ハ、初至_レ石頭掩_レ却口_一セラレテ有省_レ処、後至馬祖、
 於_レ西江水_レ処、大徹大悟。佛法ハ、至_レ西江水_一、答話廣大ニ
 リタト、養叟和尚云、悟_ニライテハ、西(一オ)江水問答ニ
 ハ、兩_レ処不答話ト云々。先師ノ沙汰ニモ、到_ラテハ純一無雜境
 界_一、此答話ハエセマイ。関山派ノハ、下語・弁相違也。揜
 而_レ湖江二字ハ、從_レ此始マル、詩ナントニ作ルモ始_レス之。コト
 ニ宋朝以來サカンニ用タ。山谷詩云、桃李春風一盃酒、江湖
 夜雨十年灯。坡_カ詩ニモ、投老江湖終不失、來時不使故人非。
 東坡ハ、江湖ハ、大略指_レ黃州。集トハ、結集之義。佛涅槃
 時、天衆尽_テ退散_ス。迦葉於須弥頂上拈_レ鉢云、如來弟子且莫
 涅槃、得神通者、當赴結集云々。今皆頌トイヘハ、目口ヲハ
 タケテ、ヲソロシサウニ作ト思フ。是ハ、大ニイワレサル事
 也。詩コソ頌ヨ、頌コソ詩ヨ。風・賦・比・興・雅・頌ヨリ
 出ル語ハ、皆同_レ事也。大灯云、柳緑花紅_ト作_レリタリトモ、明
 眼ノ者ツクリタラハ、頌_レチヤ。八角磨盤空裡走_ト作_レリタリトモ、
 不明眼ノ者作_レリタラハ、頌_レテハアルマイ。サル程_ニ、頌_レ作事

大事也。古人皆以頌、明眼不明眼ヲシル。或本ニ、江湖詩集トアリ。是モノカサ、ルコトソ。詩モ頌モ、ツクリ手ニ依テ同シ物ト云。證拠ニハ、古徳、答話ニ、賈島カ詩ヲ全篇答タ。又、中興禪林風月集ト云タ。是モ、僧ノアツムル頌テアルホトニ(1ウ)云タ。楊誠齋之第一番集ヲ、江湖集ト云タ。是ハ、夷中ノ方テ作タ詩ヲ集タ。江西湖南ノ義ニアラス。又、以、頌明眼不明眼ヲシル證拠ニハ、六祖神秀之偈、機縁可引。日本テハ、藝州ノ慈休上司頌ニ、同人訪寂寥、通霄對明月、一句合頭語、万劫繫驢轡。大燈國師云、慈休上司ハ、目クラカト思タレハ、明眼ノ者テアツタケルト、是モ以、頌知レ明眼。同人ハ、知音之謂、善知識ニ云モ、善友之義、人、皆知音簡要チヤ。月ヲ見テ心得テ、合頭シタル語ヲ、向上ノ眼カラ見レハ、繫驢繫^{マシ}。一義ニハ、用テ云タ。合頭シタル語ヲ、万劫マテ用イタ。師又云、明眼ノ人、念佛ヲ申タリトモ、真実ノ佛法也。目クラハ、直指人心、見性成佛ト云タリトモ、佛法テハアルマイ。教云、一失人心、万劫不復。教者ノ心得ト、禪ノ心得トカワル。教者ハ、一^ヒ人身^ヲ失スレハ、万劫千聖モ難^ク受^ク人身^ヲ、禪ノ用^ヒハ、一失人身トハ、截断也。能^ク截断シタレハ、万劫ニモ輪廻セスト、教者ノ心得ヲ用ニ、受人身輪廻シタハ、モツケソ。故人皆江湖兄弟ト云ハ、參禪ヲト口リトシテ、頌ナントヲモ、(2オ)能クツクルヲコソ云タレ。錢タニアレハ、誰ヲモ兄弟ト云、ヲカシキ事チヤ。

四明^ハ、処名、見^ニ于注^ニ、雪豆山也。石窓^カアルカ、四方穴アイテ、日月、光カイル。四明ト云是也。濟大川、大川^ハ号、普濟^ハ名、圓悟勤、大惠果、拙菴光、折翁琰、大川濟、故^ニ林際宗也。サテ、言句モヨイ。住^ニ杭州靈隱寺^ニ、四明人也。頌ツクリチヤ。此頌^ハ雜毒集ニハ、卒闇之頌テアルト載之。闇ト庵ト同^シ。大惠和尚ノ雜毒集ハ、別也。大川録ニモ、不載之。大川、蜘蛛頌曰、一絲掛得虚空住、百億毛頭殺氣生、上下四維羅織了、一無漏網話方行。大灯句、有下語、第一突出難辨、第二水洒不著、第三風吹不入、第四遭人怪笑。此頌ハ、第三句マテハヨシ。第四句尾タレニ作タ。故^ニ下語^ニ、定^テ人^カ可^ク笑^ト也。縵而大川ハ、言句、上手、山門佛事云、春山疊乱青、春水漾虚碧、大解脱門開、把手拽不入、喝一喝。是山門ノ佛事之喝、本チヤ。一二句カ解脱門、直指シタ。把手拽不入トハ、此門、大衆ヲイレト接スレトモ、エイラヌ程ニ、ソコニ當テ、一喝シタ。先師ノ沙汰ニモ。是ラガ、(2ウ)山門ノ喝ノ手本チヤ。今代ハ、佛事ナラハ、喝セイテ叶マイ様^ヲ思フ。近比ヲカシキコトソ。其中テ喝スル事アルヲ看テ、喝スル者也。師又曰、解脱門ハ、本分^ヲ。呼作^レ門。此門ハハ、三世諸佛、歷代祖師難^ク入、言^ハ、可^ク入^ル処カアリテコソ。解脱^ハ大海ナント、云モ、本分解脱シタル者ハ、本分^ヲデハナイカト、捻シテ、海ヲハ本分ニ用ル、無^レ涯ホトニ、上^リ兩句ハ、解脱門也。直指シテミセタ。此門^ハ大衆入レト接スレトモ、

不_レ入_二ニヨテ、ソコニ當テ喝シタ。師又曰、然共、此佛事ハ、
一_二句ハ、一句過キタ。短語ニテアルホトニ、古語ヲ兩句
マテ双テ置タハ、不足ナ。喩ヘハ、筋ヲニツ、ツキ立テ置タ
ル程ノコトチャ。

別抄云、江湖私記、鬻菴講師、夢粥發起、永享八年三月四日、
始而講之。此頌凡二百六十三首、此内百首易解也。應夢岩
云、唐土不開板此集、故不可講云。近來圓千峯外跋尾、傳
于日本也。大鑑跋千峰跋、其謂、憩松坡編此集、云々。松坡
嗣于無準、晚年中風矣。在無準下為侍者、又司藏鑰、(3才)
元朝有道人多隱居、故稱中風而隱。

此集所選、而載作者、或最大於一世者、或陸沈於衆底者、或
憩息不輝者、凡七十五人、此内十七人、不知其嗣法也。大鑑
書跋、其編中每首加_レ点、唯三十八首不加点、是更不知之。
跋中有言、是為初學取則矣。後可棄之。蓋詩以毛詩為本、至
於漢魏有變。由之思之。咸淳・景定時世、知識皆華飾、言句
与上代祖師傳法偈相易、故欲_レ使_三孝者_ヲ知_二其所_レ本也。應
夢岩云、人皆以_三秋水秋雲_ニ共依、_一為_二詩、以_三倒騎牛入_二佛殿_一
為_レ頌、可得_レ不笑耶、云々。然則、倒騎牛入佛殿、亦以世俗
意意用之則沒巴鼻、縱為_三秋雲秋水_一、其所用把鼻即為頌也。
故二百六十三首、悉入法理、可解者最大事也。傳灯録第二十
八・九卷等、載偈頌曰、詩也。頌者、說法理之詩、然則、名
曰江湖風月詩集亦可矣。

蘊恕中、山南雜錄者、宋景濂序之。其録中云、先師道竺源、
老年閑居天台紫籙山、而策發後學不倦、嘗謂做(3ウ)頌事
理俱到、譬如打索兩股緊緩不同則不堪矣、云々。
慈視院義堂、貞和集、取此集中頌四十八首也。大鑑限三十六
首、不加_レ点、最不審也。

圓千峯跋有言、普編而作名之為江湖集、云々。風月二字、後
加之歟。江湖者、集江西湖南名匠偈頌、故名之。風月者、比
類中興禪林風月集、以加此集題、芳者見矣。中興禪林風月六
字、出於風騷集中矣。

唐本江湖集、不來于日本也。有大唐耆宿跋則可以講之。
閔東有抄、注用之最非也。其抄、又副削二三本、第三增而著
言說、猶弥非也。作者名數中、不知行狀廿人。

或抄云、此集者、唐土カラハ、スリ本ハ、不渡也。碗千峯、
新編江湖集後跋云、江湖集、如大卷載、可鼎味、以此見、
松坡雖忘江湖、猶未忘江湖也、トアルホトニ、江湖集、憩松
坡ノ所編ト見ヘタリ。イサ不知、別_二江湖集トテ、集_レ頌タ
ガ、有歟。又、実_三此本ノ事歟。(4才)憩松坡ハ、宋朝ノ末
カラ元朝始マテカケテ、イラレタ人也。初ハ、靈隱テ焼香侍
者シテ、藏主ニナラレタ。其後ハ、風疾ヲ疾テ、不出世、ヒキ
コマレタ。宋朝末以來、名尊宿作ラレタ頌トモヲ、或見或聞
ヤヲ集テ載ラレタソ。総計二百六十三首也。作者七十二人也。
法嗣ト生縁ト不詳者十七人也。生縁ハカリ不詳者二十人、江

湖風月集ト云モ、松坡ノ名ツケラレタ。江湖ノ字ハ、馬祖居江西、石頭居湖南ラレタ時ニ、孝者カ、兩地ニ參禪スルソ。其カラ、江湖ト云ソ。今叢林ニ江湖ト云モ、馬祖・石頭カラ始ルソ。風月トハ、吟風嘯月謂也。僧ノ作タ詩ヲ集メタラ、中興禪林風月集ト云。在家ノ者詩ニハ、楊誠齋カ第一番集ヲ、江湖集ト云。是ハ、其中ノ方テ作タ詩マテソ。江西湖南ノ意テハナイソ。此集ハ、大抵皆無準派・大惠派ノ頌カ多ソ。大鑑禪師ハ、江湖集ノ頌ニ、点ヲ合レタソ。三十八首ニ点ヲ落テ、悪イト云レタゾ。ベシタル事ハ無ソ。心得ヘシ。

四明大川和尚、大川琰浙翁、々々嗣光佛照、々々嗣大惠、(4ウ)琰浙翁之弟子、有四人名尊宿、聞偃溪、肇淮海、明介石、濟大川也。此濟大川ハ、初住靈隱、々々ハ、唐土五山ノ第四番也。後住淨慈セラレタ、淨慈三十八世也。其外出世ハ多ソ。四明トハ、四明人ナレハ、地ノ名ヲ云。雲章曰、江湖集中、可_{ナル}者不過二三、瑠璃燈棚之解、皆甚不可也。或以テ瑠璃作灯棚之義、可_レ發_ニ一_ニ咲_一。瑠璃即灯、即瑠璃、不_レ言_ニ瑠璃_一、而_レ知_ニ是灯_一、不_レ言_ニ灯而知_ニ是瑠璃_一、何也。清規曰、瑠璃者、即点灯也。所謂点茶点湯之義也。瑠璃者、灯盞之謂也。然則、瑠璃灯棚者、置瑠璃盞灯於棚上也。校大川語録、無此頌、々亦不妙。類兒童之語、憩松坡、以此頌蒙編首則無謂哉。凡吾宗門著書而建立言句、則必可編如此頌於首也。所以如何。佛有三身、法身不說法、報身雖說法、但對

上々之機、唯應身、中下根也。故吾宗師之利生接物者、約三身則應身也。日月灯佛者、日是法身、月是報身、灯是應身。儒家以玉比_レ孔子、瑠璃者顏閔、求孟子之一揆也。故此頌々出本分未_レ十成。曰、氷壺凜、玉竜蟠、云々。(5オ)第三句、好是_ニ二字、着_レ眼看_一。不可無意趣、餘當時未解其意、大率問_ニ事_一於唐人及入唐者、以日本人不能知彼土之事、就其所問字面而以詭誕之說解其義、豈果信其言耶。有唐人韋遠者、其所作詩出張德連右。余嘗以好是_ニ二字問韋遠、彼土說話而何等語哉。遠曰、好々、十分好、十二分好云々。好々者、好耳。十分好者、其好者十分、十二分好者、好出十分之外也。雖然好是之義未_レ曉然、余按古語云、好是明々說、任他鴨聽雷、由是觀之、好是猶言也。好未十分好之意也。山堂者山堂耳。抄及盧堂、未_レ必然。無月夜灯火如星斗、皆是形容、應身光影辺之事也。故於始瑠璃棚、終以嘯雪頌云、味中不帶_ニ犬羊ノ氣_一、元是漢家天上_{ヨリ}來_ル。所以說應身而皈法身也。雖且立應身、々、者法身之用也。應身即法身、一身三身、々、一身之義也。若於作者名下入注解、則只書諱某甲、法嗣某処人而足矣。書道号說所不取也。

或抄云、瑠璃灯之棚歟。瑠璃之灯棚歟。(5ウ)有二義。瑠璃ヲ張テ、灯籠二竜ヲ紋ニスル歟。其時ハ、瑠璃テラウデ、灯籠ヲ棚ノ様ニ張タソ。是ハ、瑠璃之灯棚之義也。又、瑠璃灯ヲ置ク棚ヲ造テ置タソ。灯ノ臺ノ義也。又、唐土二人カ云

トテ、以草作^レ竜^ヲ、其上^ニ青幕^ヲ張テ、其下^ニ灯ヲトホセハ、其竜カ活テ動^クヤウナ心トモ云。雜説不合ソ。頌ノナリハ、以^レ瑠璃^ヲ作^レ灯籠^歟。以^レ瑠璃^ヲ棚ノ様^ニ灯籠^ヲ造歟。瑠璃灯ヲ棚ノ上^ニ置タト云モ好ソ。淨慈・靈隱^ニ盧堂トテ、行者堂^ヲ云。因^ニ盧行者^{一名}也。盧堂ノ天上カラ繩ヲサケテ、此瑠璃ヲトホスト云ソ。

或抄云、灯籠文也。又云、以瑠璃作^レ竜^ノ形、従口中出灯焼之。棚灯者、但元宵・除夜二節也。如^レ此点、杭州靈隱寺元宵灯、為^レ天下第一也。又云、范至能瑠璃毬詩アリ。瑠璃毬、灯籠也。

(二) 【四明大川普濟禪師】

(一) △瑠璃燈棚

瑠璃^ノ灯棚、瑠璃灯ノ——、兩点也、トレモヨケレトモ、瑠璃ノ灯棚ト云カ親シ、留离灯ノ棚ト云時ハ、油器ヲ瑠璃テシタ、瑠璃ノ灯棚ト云時ハ、棚ヲ結構ニシタガ、瑠璃ノ(6才)様ナト云義、又ハ、灯影カ、棚ニウツリタカ、如^レ留离^一、又清規^ニ、点瑠璃云々、此時ハ、灯ノ名也、以^レ之見則瑠璃ノ灯ヨイ歟、歳時記云、蘇州ニハ、以瑠璃為^レ諸物之形、或抄云、蘊如中、雜毒海集、以此頌為^レ卒菴頌^一、其題ニハ、無^レ灯字也、瑠璃毬モ、灯也、トレテモアレ、灯ヲ作タマテ也、此頌ヲ一番ニ置タハ、

以灯之義、言ハ、一灯分作百千灯、無^レ昼灯也、故^ニ五灯アリ、傳灯ト云モ、傳字ハ、不断ノ義、日月モ不^レ及^レ灯、日ハ、昼ハカリトホス、月ハ、夜ハカリテラス、定灯ハ、日夜ヲ照ス、今モ唐土ニハ、除タ、元タ、童子、ツエノサキニ、灯籠ヲユイツケテ、イカ程モ、持テハヤス、漢ノ時、摩騰竺法蘭、經ヲ説、従天竺渡^レ唐土^一、厥時、儒家・道家ヨリ、奏聞シテ、欲^レ發^レ佛經^一、漢王曰、所詮・儒書・道書・佛經ヲ焼テ見タ、可依其靈驗、則集而焼之、佛經、不^レ燒、故^ニ漢時ヨリ、佛經盛^ニ于世^一、祝之、除タ^ニ燒^レ灯、殊^ニ杭州靈隱寺^ニ、点千灯也、日本ニモ、サギツチャウト云、此(6ウ)政カ、是モ佛法守護ノ為ト云、法華經ニモ、我見灯明佛、本光瑞如此、又云、范至能、瑠璃毬詩、瑠璃毬ハ、灯籠也、以^レ之見則瑠璃灯ヨキ歟、

氷壺凜々^{トシテ}玉龍蟠^ル、吐^ニ出明珠^ヲ照^レ膽寒、好是^レ山堂無^レキ月夜、一天^ノ星斗墮^レ欄干^ニ、

氷壺トハ、水ノ入タル壺ノ様ナ、ト云義、油器也、瑠璃凜々トイヘハ、句カワルサニ、氷壺ト云、言句ノアヤチヤ、凜々トハ、スサマイ義、又ハ、映徹ノ義也、玉龍蟠トハ、竜ヲ灯籠ニ紋ニシタカ、灯籠ヲ竜ノ形ニ張タカ、推量スルニ、棚ノナリカ、蟠トハ、マンマルニナリタル形ソ、留离ノ形ヲ云タ、留离ノ紋カ、玉龍蟠(異ニハ

無之ト云ハ、可也、又、玉竜ハ、灯心也、吐出——、吐出明珠トハ、竜ハ珠ヲ持ツ、驪竜領下珠トモ云タ、推量シタニ、竜ノ腹中ニモアルヲウ、トホス火ノ、灯蓋ノ中ヨリテラスヲ、明珠ト云タ、吐出トハ、光ヲ出スヲ云、此時ハ、留离ヲトホイテ、棚上ニ置タハ、不可也、又云、吐出ト云タハ、争珠竜ヲ張タカ、照膽寒トハ、灯ニハ(7オ)ヨララ子トモ、就漂々之字ヨイ、人ノ膽ヲモテラシ、竜ノ腹中ニトホスホトニ、龍ノ膽ヲモ可照トソ、瑠璃ヲモ、竜ノナリニ作ル故、ナニカ、サウハアラウソ、多ハ、ミニクイ、此中ニ、多クトホス程ニ、云タカ、吐出ト云処ニ、火ノ多キ心アリ、又云、明珠ハ、光ナリ、以珠比光、膽ハ、五臓ノ頭ソ、肝膽楚越ト云モ、肝与膽相双^フ、雖然、スコシアイニ物アリテ、隔タル故、肝膽楚越ト云モ、開^レ口看膽ト云モ、一言云イ出^セハ、五臓カ尽^ッアラワル、見スカイタト云義、膽^カ頭テアル程ニ、膽トイヘハ、五臓カ露出也、寒ノ字ハ、灯ノスサマシキニモナリ、人ノスサマシキニモナル、兩面目アリ、膽ノ字ハ、コ、テハ、竜ニツク、底心ハ、人ニツク、是モ一片ニハ見マイ、好是——、是ハ、好ノ字、簡要也、灯ハ、月夜日午ニトホセトモ、光ヨシ、是ハ、殊無月夜、マツクロナニ、トホイタホトニ、一段ノ光明ヨシ、居士モ、好雪片々不落別処ト云タ万法不侶トテ、万法ヲ嫌

タカ、是ハ又、万法ヲ本分ニ用イタ、喚^レ雪本分ニ用イタ、学者ノ能^レ見事チヤ、畢竟好字著^レ眼、是^レ字モ、(7ウ)肝要チヤ、不与万法為侶、是什麼人、云ハヌカ、碧岩ニ、只這是トモ云タ、山堂トハ、行者堂也、盧堂ト云タ、一天——、灯ヲシツカト、トホイタハ、一天星斗ノ多イ様ナ、星斗カ、落^レ地テアルカト思タ、一天トハ、トツコモト云義、落^ッ闌干ニ、兩点也、瑠璃灯棚之題ノ時ハ、闌干ニヲツルトアル、可也、棚ノ字ニ、闌干アリ、師又云、畢竟脚踏下^レ大光明也、這ケ光明ハ、天地之際ニ弥綸シテアル、落^ニ闌干ニ、此時ハ、死句ニナリテ、ワルイ、落^テ闌干^{ナリ}、此時ハ、活句ニナツテ、ヨイ、真無為上堂云、留离殿上見灯棚、裁截春雪——、又中峯所集灯部、有留离灯、又、曹子建句云、北斗欄干^{ナリ}、大明眼ノ祖師ノツクリタル頌ヲ、叢林ノ尊宿達ノ、皆批判スルハ、ヲカシキ事也、殊ニ以^レ教アハセラル、言語道断之義、言句ニ教^ツクリタリトモ、禅ニ引入テ讀^ニナスヘシ、何況活句ニテアル頌^ヲ、以^レ教意批判スルコト大ナル錯也、以^ニ禅話教^ニアハセルハ、玉^ヲ泥中ニ埋タル程ノ事ソ、日本テモ、靈彦侍者ハ、下炬拈香ヲ(8オ)メサレズ、頌ナントモ、鼠骨ニハ、作^ラレサルト也、平生云、頌ナントハ、春甫ノカ本也、是ハ、正直ナル義、唐人モ、春甫ノ頌冊ヲ見テ云ク、不凡作々々々ト、又、天竜寺春林和尚モ、終^ニ下炬・拈香^ヲメサレス、鹿苑院マテ

ナリタル人ナレトモ、一期間停止之、鹿苑院テアル程、トライテカナハサル布施ヲハ、鹿苑院ニ半作之塔アリ、為建立益^ニ寄進スルト也、平生云、無眼子ニテ、布施ヲトリコトハ、大ニヲソロシキ事チヤ、明眼ノ人ノ言句ハ、イカ様ナル事ヲ云タリトモ、自然面目可^レ備、佛祖以來、此道ヲ不^ニ心得者ヲハ、出家トハ云ワザルソ、文字ハカリアル人ハ、儒者チヤ、其上、宋朝以來ノ儒者ハ、東坡・山谷ヲハシメテ、參禪ヲシタ、文字ハカリノ僧ハ、惟肖・江西ヲハシメテ、儒者テコソアレ、禪僧テハナイ、サリトテハ、是ハ、理ノ至極ナリ、我瞞^ニ情識ヲ以テ、云ニアラサル也、又、此頌ヲ、全篇活句^ニ可^レ見、玉竜モ似セ物、明珠モ似セ物、星斗モ似セ物、皆ナイ事ヲ云タ、此時ハ、落^ツ欄干^ニ、此点アシ、道理ヲチタ程、云イツメテ、死句ニナツタ、(8ウ)

(2) 金剛大士相

金剛大士ト云者ナイ、此大士形ヲ、金剛三十三段ノ字ヲ以テ^レ昼^レ之、大士トハ、等覺菩薩ヲ云タ、本録ニハ、金剛經書大士相、今時題^ニ出則、可^レ題^ニ金剛經書觀音^ト也、金剛ハ、至堅ク至能碎^ニ万物^ト也、此經ハ、能斷^ニ衆生執着^ト故^ニ、名^ニ金剛經^ト、觀世音トハ、世ハ、衆生也、音トハ、衆生万ノ邪心也、應現於其心而濟度、故云^レ觀^ニ世音^ト、由來詳^ニ于抄^ト、大士ハ、賞翫之語、題ニハ、ヒ

ツキツテ、略シテ書シタ、日本ニテ、普廣院殿ノ位牌ヲ、大居士ト書ス、山門ヨリ、是ヲ不審スルコトハ、隱者ナントヲコソ、居士ハ可^レキ書、將軍ヲ居士ト書タハ、イハレサルソ、龐居士・林和靖ナントヲコソ、居士トハ、書ヘキナレ、相國寺ヨリ荅云、居士ハ、且置、大ノ字ヲハ、ナント心得タソ、大ハ、イカホト大キナリ物ト思タソ、大ノ字ホト、賞翫ハ、ヤワカアル、山門其後無語也、総而在^レ家^ニ行^{スル}道^ヲ居士ト云タ、(9オ)

大士ノ應身三十二、一身^モ三十二重^ハ非ナリ、金剛ノ正體軀是非^外、鵲噪^キ鴉鳴^テ無^ニ了^{スル}時^一、

大士——觀音經ニモ、三十二身カアル、應身ハ、法報應ノ三身、三十二、金剛經ノ三十二段也、是則三十二身、一身^モ三十二重^ハ非ナリ、又云、一身^ト三十二重^ト、非ナリ、言ハ、一身ヲコソ、三十二テアル程ニ、三十二ハ、衆生度セウ為^ニ、分身デコソアレ、別ノ物ト意得^ハワルイ、一身三十二讀^キツテ、重非ナリト讀ハ、不是、其点ノ時ハ、一身モ三十二段、觀音ノ三十二身トヲ、取合^テ、金剛ノ字ヲ用タ、又或抄云、此点ノ時ハ、一身モ三十二重^ト、重非^ト云心ソ、甚^ク不可也、又或抄云、一身^ト三十二重^ト、非^{ナリ}、此点可^レ愛、金剛ハ是法身、一身トハ、指^ニ法身^ト、三十二是示現^ノ身也、表昭明太子所分、金剛分段也、依宗門之義、則觀音ト云ハ、法身テモナク、化身テモナイ、

重非ノト、為顯法身上、餘宗ハ、不談之、皆言、一身ハ是也、三十二、非也、金剛——、鵲噪——、金剛正体トハ、金剛經ノ金剛(9ウ)テハアレトモ、縁語_ニ用之、金剛トハ、碎_レ物_ヲ而_レ不_レ碎_レ物_ニ、金剛杵ナント、云タ、金剛不壞正体ト云テ、別ニハナイ、然レトモ、不涉是非者_ニチヤ、是非ノ外ト云ヘハトテ、別ニハアルマイ、サテ、ナニカ、金剛ノ正体ソ、ト云ヘハ、鵲噪鴉鳴、サラニ別ニハアルマイ、無_レ了_レ時_一ト云、是也、鵲噪鴉鳴_ノコソ、眞說法、觀音入理門也、法相宗ニ、樹林草木鳥声ト云、是也、如此云ヘトモ、不_レ識_レ落居_一ホトニ、無_レ曲、一義ニハ、金剛正体是非外ナント、巴鼻ヲツケタカ、鵲ノ鳴キ、鳥ノ鳴クホトノコトチヤ、却_テヲカシイ、無_レ了_レ時ト云義、是也、了_レ時_一ナシトハ、不断ナクト云義チヤ、ナキヤムコトナキソ、無_レ了_レ時_一、此点モアリ、老宿云、第一句ハ、無用ノ應身哉、イカニ應身シテ、衆生ヲ度セフトスルトモ、已_ニ佛_ノ三不能_ニモ、一_ニ一切衆生不_ニ度_{尽_一}、イツマテ、身ヲ現シテ、可_レ度_ニ衆生_ヲソヨ、二ノ句ハ、イツレモ、非ナル物チヤ、是ハ、根本ノ眼ヨリ見下イテ云タ、第三句ハ、一二_ノ句_ヲ注脚也、一身三十二_ヲ已_ニ非_ト看_タ上_テハ、是非外語ハ、剩語ソ、但_シ孝者_ニ深ク示シテ云タ、金剛正体(10オ)トハ、何ソ、著_レ眼_ヲ可_レ看_ル処チヤ、第四句ハ、畢竟シテノ落処也、現成_ニ可_レ見_{、前}

色々云タハ、皆是ナンノ道理モナクコトチヤ、金剛ノ正体カ、鵲噪鴉鳴デアルト、落居ヲシラスンハ、学者ハ、終_ニ可_レ無_レ了_レ時_一、鵲噪鴉鳴ヲ、落居ト云、簡要也、法相宗ナントハ、樹林草木鳥声ノ上カ、乃佛法ト云、是モ落居ヲシラス、ヲカイ度ソ、落居ト云度、簡要チヤ、金剛正体_ヲニシリタラハ、鵲噪鴉鳴ノ落居ヲ可知、唯鵲噪鴉鳴ノ上_コソ、金剛正躰ヨト、可_レ看、

(3) 吹_レ笛_ヲ術者

易卦テコソ、人ノ禍福_ヲ知_ル物ヨ、是ハ、笛ノ声テ、ウラナフタ、是ハ、人_ニフカセテ、キイタカ、我ト吹テウラナフタカ、人来テ、吉凶ヲ問時ハ、吹_レ笛_對人、吉凶ヲ云、座_ノ頭_ノ十二律ヲ吹テ、音律ヲ知ル如ク也、知命_ヲ云ハ、壽命ハカリテハナイ、知命ハ、人ノ禍福吉凶_ヲ知_ルヲ云、私云、笛ハ、武帝時、丘仲所作、長一尺四寸、七孔、

〈大川住大慈寺作也、淨慈ニモ住セラレタレトモ、是ハ、明州ノ大慈寺也、峯ト置ハ、寺ハ、山ト一致也〉、

慈峯ノ古曲無_レ音韻_一、知命先生知_レ不_レ知_ヲ、甲乙丙丁庚戌己_ヲ、(10ウ)陽春白雪鷓鴣_ノ詞、

慈峯——、我宗門ノ即一曲ヲ云タ、此一曲ハ、不涉_ニ音律_一物チヤ、又云、古曲ハ、我家々ノ秘曲也、雪豆頰、

一曲兩曲無人會、雨過夜塘秋水深、又、曲終人不見、江上數峯青、作夕、是ハ、詩ナレトモ、以_レ二曲字_一、コナタニ用タ、捻シテ、詩ヲ把テ用ル・多シ、以前モ申ス、頌語モ、ヤハラカナルカヨイ、禪話、別テアルナント、云ハ、ヲカシイ夏也、僧問古德、蚯蚓爲什麼作百合、古德以_レ賈島詩全篇_一答話シタ、三四句云、如今又渡桑乾水、却指并州是故郷ト、言ハ、咸陽カ、本ノ故郷也、并州ヘ流サレタル時ハ、咸陽カ戀シカツタカ、今又多國ヘ流サルレハ、カナシカリケル、并州モ、居ツケタル処テアル程ニ、恋シイ、今ハ又故郷ノ様ニ、并州ヲ思ト也、知命——、此先生ハ、律タモ、命ヲモ、吉凶ヲモ、不_レ知者テアルカ、古曲無音韻ト云ニ、涉_レ五音六律ニ_レコソ、知ラフスレ、知タカ、ヤハヤシラル、此術者ハ、以_レ笛音律ヲハシルヘシ、古曲無音韻ヲシルマイ、先生ハ、俗人ノ敬_レ言、知命ハ、五十知天命、(11オ) 甲乙——、陽春——、是コソ、慈峯ノ古曲ヨ、陽春白雪、曲名、古樂府、陽春白雪ハ、瑟曲名也、以_レ張華、博物志、考之、陽春白雪ハ、琴曲也、非_レ笛曲也、此用之者、管絃共古曲、故云尔也、鷓鴣詞亦曲名也、鄭谷詩云、座中尽是江南客、莫向春風唱鷓鴣、(此詩ハ、前書ニアリ) 現成ガ、即吾家ノ古曲ヲハ、離マイソ、五音ハ、五行カラ出ルホトニ、六十甲子ノ時、甲子、某火也、丙虎、某火也、晦堂

笛、頌、笛裡有聲知否恭、不知那ケ是知音、以_レ三十_一考_二知人之吉凶寿夭兆_一也、己_ハ、二ノ句_一知命方ヲ云、云_二甲乙丙丁_一考_二人ノ命_一、又、陽春白雪ノ曲ヲハシルヘシ、無_レ音律、吾家古曲ヲハ、不_レ可_レ知ト也、老宿云、第一二句云、古曲トハ、天地未分先ノ一曲也、其實_レ音律ハアルマイ、其ヲハ、知命先生カ、シラヌノミナラス、三世諸佛、歷代祖師モ知ルマイ、濟大川モ、如此ツクリタレトモ、エシルマイ、先生ハ、俗士ノ通称也、又ハ、五音六律ヲシル夏ハ、汝ユルイタ、宗門ノ邪一曲ヲハ、エシルマイト、不_レ許云タ、有抑揚、又ハ、知_レ不_レ知ヤト云タニ、直指モアル、第三四(11ウ) 句ハ、是ハ、術者ノ上ヲ以テ、シメイタ、吾家ノ一曲、シラヌガ道理チヤ、ソチハ、甲乙丙丁、陽春白雪ノ上マテ、相_レ物マテノ分濟也、吾家ノ曲ハ、耳ニモ不_レ聽、言語ニモ難_レ宣、雖然、打話工夫參得セハ、少林無孔笛トハ、別テハアルマイト、直指シタ、陽春白雪ヲハタラカサス、現成ニ看タ、宗門各有秘曲、林際、僧問、唱誰家曲、宗風嗣阿誰、云々、又、大惠、西江水ノ頌曰、甲乙丙丁庚戌己、洛陽牡丹新吐葉、參シテ知コト也、是ハ、戊己庚トコソ、アルヘキニ、庚戌己ト、サカサマニライタ、濟大川ハ、大惠派ノ僧テアルホトニ、如此置タソ、

(4) 謝故旧ノ書

旧友ヨリ来ル書ヲ謝テ、此頌ハ、定テ回章ノ末ニソ、書テアルヲ、楮尾有餘ナント、書テ、文ノ奥ニ皆今モ頌ヲ作テカク也、

書頭ハ、道德磨星斗、書尾ハ、名山天子ノ除、事緒中間千百萬、
書來ハ逆耳一言無シ、

書頭——、書尾——、啓冊之法ニ、一番ニ徳ヲホムル、故ニ書頭ニハ徳ヲ云イ、書尾ニハ天子(啓筭ノ法、起頭ニハ、必置ニ仰レ徳慕道之語、所謂望三泰山ニ仰北斗者也)(12オ) 勅シテ、名山ニ住持ニナサレタト云、磨星斗ハ、道德ノ高イヲ云タ、徳輝乾坤ニ之義、書頭書尾ハ、出ニ于普灯録也、是ハ、カキ様ヲホメタ、天子除トハ、詔書也、今モ、紫野ナントモ、綸旨テ入院スルソ、三体詩ニ、毎日除書雖滿紙、——、捻而冥可果報ハ、前世ノ酬イ、修行力也、徳ハ一世、サルホトニ、身モチ簡要チヤ、事緒——、一言——、言ハ、朋友ノ間ハ、忠言簡要テアリ、人ノ意見教訓スル事ハ、一旦、腹カ立ツトモ、ツメテハ、良薬也、是ハ、千百万ホメタルマテ、教訓ノ卷ガナイ程ニ、曲モナイ、事緒トハ、連續ノ義、千百万トハ、色、ノ叟ヲ書タ、忠言逆耳、良薬苦口云々、是ハ、耳ニ逆叟ハ、一ツモナイ、ホメタマテチヤ(史記曰、沛公入秦宮、樊噲諫ニ、沛公ニ不聽、張良曰、忠言ハ逆レ耳

利於行、良薬苦口利於病、願ハ公聽ニ樊噲言、) 老宿云、第一句、道德トハ、面ニハミエヌ、自然ニ備ル物チヤ、乍レ去、修レ徳養レ徳ヲハイテハ、終ニ徳ハアラハレヌ、宝訓云、大覺云、夫為一方主者、欲行所得之道、而利於人、先須克己惠物、下心於一切、然後、視金帛如糞土、則四衆尊而飯之矣、又、舜老夫云、識因果明ハ罪福、乃操履之美、弘レ道接ハ方来、乃住持之美、云々、出家タル者ハ、道德簡要也、星斗之照ス(12ウ) コトクニナフテハ、第二句ハ、拜ニ天子詔、雖レ住ニ名山、悔補宗門之心也、第三四句、此文ヲ披テ見タレハ、始頓首再拜、終不宣マテ、ツイニ逆レ耳一言ヲ承ラヌホトニ、實ニ是不喙之功、我無徳而住名山、古人云、位崇謗興、名高毀リ至、云々、誉之下ニ、必毀ル心アリ、毀之下ニ、必誉ル心アルホトニ、故旧ノ心ヲ愧タ、根本ヨリ看レハ、ホメテカイタモ、ソシリテ書タモ、畢竟閑言語、又、此頌ハ、抑揚アリ、林濟録云、大好善知識、不知好惡ト云義、禪僧ハ、ホムルニモアカラス、ヲトスニモヲトサレヌ者ソ、又、或抄ニ、覺鉄紫先師、無語ト云叟弘ク、スチナキ叟ソ、(老宿云、故旧ノ贈処ノ書ハ、皆順行也、宗旨ノ逆行ハ、一ツモナイト、抑スル也)、

(5) 送三川道士

是ハ、蜀ノ道士カ、来テ販ルヲ送タ、川ハ、名テハナイ。
蜀ニ東川西川アリ。呼蜀為川（蜀ニ有東西蜀、コ、ハ西蜀也。）道士ハ、学老子道、而煉丹保長生者也。日本ニハ、未渡者也。唐ニハ、道士觀トテ、多キ也。

丹竈功成テ氣似^レ虹ニ、掀^ニ翻^{シテ}丹竈^ニ到^ル無功^ニ、雲、遮^ル劔閣三千里、水ハ隔^ツ瞿塘十二峯。

言ハ、煉丹功成ホトニ、我ニ上スル上手ハアルマイト、ケシタ。氣似虹トハ、讚語、意氣ヲ云タ。（13オ）又ハ、從凡聖ヲハ、丹ヲ煉リスマイテアルホトニ、身モ輕クナツテ、飛アルクヤウナ、掀^ニ翻^{シテ}丹竈^ニ到^ル無功^ニ、雲、遮^ル劔閣三千里、水ハ隔^ツ瞿塘十二峯。

言ハ、煉丹功成ホトニ、我ニ上スル上手ハアルマイト、ケシタ。氣似虹トハ、讚語、意氣ヲ云タ。（13オ）又ハ、從凡聖ヲハ、丹ヲ煉リスマイテアルホトニ、身モ輕クナツテ、飛アルクヤウナ、掀^ニ翻^{シテ}丹竈^ニ到^ル無功^ニ、雲、遮^ル劔閣三千里、水ハ隔^ツ瞿塘十二峯。又ハ、道士別後、雲水ヲ隔^フスト、名殘ヲ惜タル義モアルヘシ。送行ノ頌チャホトニ、

老宿云、第一二句ハ、一ノ句テハ、道士ノ修業至極ノ上ヲ云イアケテ、二ノ句テ、宗門ノ上ヲ示ヤ、雲門九還丹ト云タ。掀^ニ翻^{シテ}丹竈^ニ到^ル無功^ニ也。底心、今道士、服^{シテ}藥三千年齡ヲ保タリトモ、終^ニ可^レ歸^ル生死輪廻^ニ、道士、

分濟テハ、丹竈ヲ掀^ニ翻^{シテ}スル境界ニニハ難^レ至。第三四句ハ、見成ノ境界ニ看ヨ。丹竈ト云タモ、掀^ニ翻^{シテ}スト云タモ、落居ハ、ナンノ道理モナイ事チャ。雲遮——、山青ノ境界、水隔、水緑ノ境界、緑水青山マテ也。師又云、三四句ハ、衲僧境界峻峻ナルヲ云タ。白塞天大行路、李白蜀道（13ウ）ナントモ、皆蜀道ノ峻阻ヲ論タ。世路危險、人心ノ峻峻ハ、難成コト也。以人心ノ峻、比^ニ山川^ニ。又義ニハ、雲遮——、万里崔州也。言ハ、功成タモ、掀^ニ翻^{シテ}シタモ、宗門カラ看レハ、千里万里ソ。趙州云、有佛処不得住、無佛処急走過。龐居士云、但願空諸所有、慎勿美諸所無。又云、直透万重関、不住青霄裡云々。一二斬釘截鉄、畢竟是ハ、功成テ後ノ境界ハ、現成テナフテハ、只落居ト看タカヨイ。

(6) △慈峯ノ千佛閣

此千佛閣ハ、淨慈（淨慈ハ、杭州五山之一也）ニモアリ。大慈寺ニモアリ。何処テ、此頌ハ、作タソ。淨慈ニハ、閣上有千佛、下有水陸堂。梁々ノ湖山、千ノ古佛、重々ノ煙樹一樓臺。善財到^レ此不^ニ彈指^セ、盡大地、人歸去來。

梁々ノ湖山千古佛ト云点ハ、ワルシ。此湖山ハ、淨慈ナラハ、西湖ノ湖山也。大慈ナラハ、鏡湖ノ五山也。言ハ、ハタラカス湖山佛也。心外無別法、滿目青山ト云タ。千、

古佛ハ、千躰ノ地藏カ、トレテモアレ。重——、言ハ、此千佛閣ニハ、別(14ウ)ニ柱ケタヌキナントハ、アルマイ。其マ、ニ、烟樹樓臺也。ナニカ、千佛ソ。湖山、ナニカ樓臺ソ。煙樹ト用テ看タ。明招独眼竜頌云、廓周沙界勝伽藍、滿目青山是對談。善財——、言ハ、不_レ勞_二彈指_一可_二入作_一。彼千佛閣ニハ、イカナル善財モ、ドコヲ正土_二彈指_一ヲハセフソ。彈指マテモ

イラスト也。善財童子ノ事ハ、華嚴入法界品_二見ヘタリ。有_レ志童子ナレトモ悟タ。南方五十三員善知識_二マミヘタ。何_レノ會下テモ、佛法成就シタ。是願力_ヲ以、參禪ヲトケタ。其願_ハ、イカ様ノ事アリトモ、師家ノ非ヲ云マイト也。以_二此願_一、ツイニ所願成就シタ。不_レ謗_三寶戒_ヲ參シタラハ、是等ヲ可_レ知。先師ノ沙汰ニモ、三宝戒ヲ參シタル者ハアルヘシ。用得者ハ、一人モアルマイ。其故ハ、無道心ニテ、大徹大悟ノ境界ニイタルマイ程、トリワキ大_レ灯_レ国師ノ語チヤ。千人万人、不_レ謗_三三宝_一戒ヲ參得シタリトモ、用得者可_レ稀。善財童子ハ、志アルニ依テ、參セラレトモ、能ク心得タ。五十三_ノ知識_ニ參シテ、一ノハテニ、弥勒ニ參ス。是ハ、天上ノ弥勒デハナイ。童子ナレトモ、悟タ者ノ手本ニハ、華嚴會上善財(14ウ)童子也。年老而悟タ人ニハ、大惠ノ弟子ノ閑長老、八十四テ初テ參禪ヲシテ悟タ。大惠聞テ作_レ頌云々。今毛皆

年老テ參禪スルハ、愧カシイナント、云。為_二生_一死_二到來_一アルホトニ、年老テコソ猶參禪ヲハセフスレ。ヲカシキ事チヤ。貴人ナレトモ、迷ノ凡夫デハツルハ、梁武帝也。逢_二達磨_一エ悟ラヌホトニ。其身賤ケレトモ、大發明シタルハ、六祖、又ハ馬祖也。其身女人而畜生ナレトモ、悟タハ、法華會上八歳ノ竜女也。悟ノ上ニハ、不_レ擇_二貴賤_一老少。又貞和集云、靈隱起方丈閣頌云、規繩一髮不容差、畫棟雕梁接彩霞、未世人無童子志、朱扉半掩夕陽斜。尽大——、言ハ、尽大地ノ衆生ハ、元來入_レ了也。処々毘盧樓閣、人々善財童子也。飯去來トハ、閣中ニ飯シタ心チヤ。去來ハ、語ノ助字也。又ハ、來字ハ、飯ノ心チヤ。イサ、ラハ、飯ラントモ、可_レ讀。飯字ハ、カヘル心ニアラス、樓閣ニ入ル心チヤ。入得ノ義、尽大地人カ、自然_ニ入得スル程ニ、彈指スルマデモナイ、ゲニモドコモ千佛、トコモ樓閣ニテアルホトニ、測明カ飯去來ト云タニハ、カハル、(15オ)

老宿云、前ノ義モヨケレトモ、面目ヨハシ、朶々湖——、重々煙樹——ト用_レ境界ニ到テハ、イカナル善財モ難_二彈指_一、然ハ、尽大地人モ拱_レ手_レ飯也、此時ハ、測明カ飯去來ノ心同シ、於_レ此、以_二大川力_一、善財并_レ尽大地衆生ヲ、此門_ニ引_レキ入テトラセントシタ、此義、我ラモ是同心也、世間ノ抄出ナントニ、是ヲ引_二教文_一ニアハセラル、無_二勿体_一一_レ更_レチヤ、罰モア

タルヘシ、以前申ソタ、濟大川山門ノ佛事云、春山疊乱青、春水漾虚碧、大解脱門開、把手拽不入、喝一喝、先師ノ沙汰ニモ、ヨキ山門佛叟、喝ノ本也、已ニ現成ノ門戸ヲ開テアルニ、難入得者ヲハ、把手拽入レトモ、尚モ不入得者ヲ、喝シタ、今時山門佛事ヲ聽ハ、大半盲喝也、黄竜死心禪師住ニ黄竜山一時、揭テ勝于門、凡置ニ三門者何也、即空無相無作、三解脱門、今欲ニ登ニ菩提ノ場ニ、必由ニ此門ニ而入レト云々、

(7) 寒衲

道号テアルラン、題ニハ不見、捻シテ道号頌ト云・ハ、古ハナイ、宋朝以来アルソ、寒ノ時キル衣也、衲ノ字ハ、納ト同、五比丘問佛ニ、當著何等ノ衣、佛言、應著衲衣、智度論ニ有之、衲トハ、ツ、リアツメタルヲ云、捻而出家タル者ハ、ヨイ物ヲハ、キヌ者ソ、又ハ、衲子(15ウ)ナント云叟、別有子細、衲ハ、衲之義チヤホトニ、又、衲所ト云モ、衲ノ義、物ヲトリアツムル程ニ、針峰不露ヲ重々補フ、線脚通アル時ニ密々ニ參ス、放ニ下シテ無針無筭處ヲ、凍雲垂レ地一肩ニ擔フ、
〔筭、竹治切、以針刺、玉篇〕針鋒——、上手ノ縫タハ、針ノ跡カミヘヌ者ソ、線脚——、針ノトヲル路アレハコソ、通ニ路ヲタレ、許ニ線道ト云義、密々——、慈母手中線、

遊子身上衣、臨行密々鋒ト作タ、実ニ子ノキル物ヲハ、念比ニ母ニ縫者チヤ、參トハ、ヌフト云義、別ニ無意、放下——、筭ハ、刺也、密々ニ縫イ、細ニ刺スト云義、筭字ノ心ハ、衲衣テ在ルホトニ、筭ハ、針ヨリハ、猶コマカニ物ヲヌイサス者チヤ、日本テハ、ツ、レナントヲ、筭ト云カ、サシツク物也、針モナク、筭モナキ処ヲ放下セヨト云タ、或抄云、無針——トハ、師家・孝者ヲ云タト、ソレマテモナイ、サリナカラ、其時ハ、針ハ孝者、筭ハ師家テアルヘシ、凍雲——、凍字ハ、寒ノ字ヲツクリタ、雲コソ縫イモセス、ツ、リモセヌ、衲衣ヨト、是ヲ(16オ)刹界佛袈裟ト云タ上ハ、ナニヲモ、ヲツ取テ、衲衣ニナイテキヨ、六粗モ衣表ニ信不レ可ニ以レ力争ト、ヲセラル、ソ、世尊金襴衣ト云モ、絲テヌフタル袈裟テハアルマイカ、阿難モイハレタ、世尊傳金襴衣外、別傳何物云々、雲ノ字面白シ、拈衣佛事ナントニモ、大庾嶺頭一片雲、詩ニモ作タ、天上浮雪如白衣、衣ト云叟モ、參スル叟也、衣ト云叟ヲモ知ライテ、拈衣ノ佛事ナントスルハ如何、大明眼ノ衲僧ハ、ナニヲモ、ヲモ取テ用ル者チヤ、是等ノ叟ハ、念比ニ糺明シ知ヘシ、又ノ義ハ、凍雲——、現成ニ見ヨ、放下シタル落居也、

(8) 漁夫

漁ノ叟ハ、詩注・文集ニモ多ク用タ、古ノ隱者ハ、漁樵耕牧ノ四ヲ用タ、宗門ニ殊ニ用タ、ドノ祖師テモアレ、言句ニ用イヌハナイ、大ニ有子細也、衲僧皆漁父ニナリカヘツテ云叟多キソ、虚堂漁夫機縁存_レ注、玄沙謝三郎機縁有之、
岸草_{上青山イ}々水上_イノ舟、夜深_テ高臥_ス荻花_ノ秋、夢_ハ回_ルテ一曲漁歌傲、
月淡_江空見_ニ白鷗_一、
岸青_青——、是人境不奪之義、漁ノ居処ヲ頌ス、春ノ艸也、
草ハ境、舟ハ人、舟ト云ヘハ、人カ(17ウ)アルホトニ、
岸上青山トアル本アリ、何モ同意也、夜深——、是ヲ、抄出ナトニ、色々云タレトモ、ナンノ手モナイ叟チヤ、漁人カ、晝ハ、一日釣ヲシテアル程ニ、夜ハ活計ニ臥タル也、ケニモ一日捕_レ魚テ、クタヒレテアルホトニ、クサト子タソ、然レトモ、高字ハ、チツト有_レ意、只ノ者ノ、フシタトハ、カハル、閑眠高臥對青山ト云、捻シテ、高臥トハ、農叟了畢シタル人ヲ云タ、此一二句ハ、春秋ヲツクリタ、春秋ト云ヘハ、四時カコモルソ、漁家ノ艸ハ、イツモナレトモ、春ト秋ト面白イ、岸草ハ春也、荻花ハ秋也、夢回——、
(傲、魚致切、楽也、漁人唱_レ之、故ニ謂漁家傲)、高臥ノ字ニツイテ云タ、ハヤ夢醒テ、一曲歌タ、傲字ハ、曲ニハツカスト、楽ノ心ナリ、村田楽ト同意、楽テ歌ヲ、曲ニ作

テアル、傲字モ、漁父ノタノシミタル体チヤ、又ハ漁家傲ハ曲名、是ハ一曲聽テ、夢カ醒タテハナイ、高臥シタカ、夢醒テトフシ歌タルソ、夢回_テトヨムヘケレトモ、句カハルイホトニ、夢_ハ回_ルトヨム也、月淡——、或抄云、白鷗ハ、邪ケ白鷗トアリ、那个トハナンソ、這個那个ト云コトモ、參スル叟也、月淡江空之時分_ニ、白鷗ヲ見タマテト、此義ハ似ヨリタ、又義ハ、白鷗(18才)ハ、忘機者也、見ル人モ無心、鷗モ無心、現成ト云、是モ可歎、江空トハ、芦花モナク、江霧江烟モナク、晴チキツタ、
老僧云、一句ハ、江西湖南之間テ、遍參シマハリ、或時ハ、岸上_{青山ニ}宿_シ、或時ハ、水上_ニ浮時モアリ、南禪寺正時院開山大光國師、昭堂ノ後壁、建長寺南浦和尚ヘ、カヤウテ參禪シタ、關東ノ路次テ、辛勞ノ事ヲ、昼師ニ写セラル、是様ナル事也、第二句ハ、參禪事了畢シテ、飢來喫飯シ、困來打眠シタ、夜深字ハ、夜深共見千岩雪、如何是夜深底、如何是千岩雪、參シテ知ル・也、雪豆、碧岩二、夜深誰共御街行、荻花秋、見成ノ上テ、ハタラカス、用テ云タ、第三句ハ、夢回トハ、夢モ參而知ル叟也、只ハ知ラレマイ、儒者モ、聖人無_レ夢ト云タ、是モ儒者ハ、シラス、四昼五經ヲ能ク享シタル人ニモトヘハ、サツハト別ノ事ヲ云、佛祖出世シテ、悉皆夢中_ニ說夢也、此心ハ、悟徹後、我カ見地ヲモ人ニシラセ、人ノ深淺高低、明眼不明

眼ヲ弁スル者也、指ニ一言半句^フ、一曲ト云タ、殊ニ於宗門
有秘曲也、垂ニ三尺釣^ヲ欲^レ釣^ニ金鱗^一、言ハ、好イ学者ヲ得
テコソ、本意ヨ、(18ウ)雪豆^ノ頌ニモ云タ、慣釣鯤鯨澄巨
浸、却嗟蛙步輾^ニ泥沙^ニ也、垂^レ釣^ニ一曲歌トハ、此事
ソ、捻而三世諸佛、歷代祖師、天下老和尚、悉皆集孝者而
辛勞スルモ、一人ノ法器ヲ得^レ爲也、今時ハ、善知識ヲシ
テ、自負者モ、名利・名文・世諦ニ没溺スル、財宝ヲタニ
出セハ、人家ノ男女ヲモ魔魅シテ、コ手マ子キヲシテ、古
則ヲ漏逗スル、コ、ロサシアレトモ、貧法シタ者カ、參禪
ヲスレハ、六惜數ナント、云、言語道斷ノコト也、第四句
ハ、可然孝者ヲ不得、而如^レ鈎月^ノ波心^ニ沈^ラ見、又ハ、用
ニモタ、ヌ、白鷗ヲミタマテ、空^ノ字^ニ著^レ心^ノ看^ヨ、空^レ手
スルノ義チヤ、今夜モ、一人ノ学者ニ法器ヲ不得シテ、
アケテアルヨト、嗟嘆シタ、又義ニ、只現成境界ニ見ヨ、
機関ノ句ヲ以、色々ニフルマヘトモ、終^ニ見成^ニ収^ル者^ノ、
禪僧ト云者ハ、向言外知趣也、意ハ、四句ノ外ニアルヘシ、

(二) 三山介石知朋禪師

(9) △夢宅

道号、作者^註石朋和尚ハ、嗣浙翁、濟大川ノ法眷也、三
山^註ハ在浙西路安吉州。又云、閩城中有之。大鑑禪師云、
此頌等為初学可^レ取^レ則^者ハ、是様ナ事也。有^ニ乘策^一、

頌ツクル法度ニナルヘシトヲセラレタ、ドコヲホメテラ
セラレタトハナイ。定テヨキ処有ヘシ。著述^ニ有^ニ法^一(19
オ)度^トハ、此頌等ナリト云々。名義集云、如夢幻泡
影、喻夢者寐中神遊也。列子分六夢、一正^一、平居自夢、
二愕^一、驚^ニ而夢^一、三惡^一、思念而夢、四寤^一、覺^レ而道^レ之而夢、五
懼^一、恐懼而夢、六喜^一、喜而夢。周礼、占六夢之吉凶、善見
明四種夢、一四大不和^ノ夢、見山崩飛騰虛空、或見虎狼
師子賊逐、二先見故夢、昼見白黑及男女相、夜尅夢見、
三天人与夢、若善知識、天人樂善得善、若惡知識、樂惡
得惡、四想心故夢、前身修福、今感吉夢、先世造罪今感
凶夢、

六窓深閉大槐宮、一枕^ノ清風瞬息^ノ中、窮劫^{ヨリ}至^レ今佛与^レ祖、
樓頭知是幾声^ノ鐘、

六窓^一、指^ニ六根^一、眼耳鼻舌身意也、深閉トハ、寢時
ハ、見聞覚知ヲ不^レ弁^ヲ云タ、大槐宮ハ、夢ノ境界也、
又ハ、心ヲ指テ云タト、蟻穴詳^ニ注^一、不及申、夢ト云
ンマテソ、是ハ、一^ノ句^ニ夢宅^一、二字ヲ作タ、道号^ノ頌ハ、
一句ノ中^ニ三字^一(19ウ)ツクル事難イ、六窓ハ、宅、大
槐宮ハ、夢、又ハ、宮ト云時ハ、宅ニモナルヘシ、六窓
ト云ハ、夢ニモナルヘシ、四戸八窓ト云事モアリ、大槐
宮ハ蟻、六國平来一瞬中、心王不動八方通、従前汗馬無
人識、只要重論盖代功、東山外集頌也、六國ハ、目前六

根ノ義、心王ハ、本分、汗馬ノ功ハ、本分ヲ能用得タ、法戰場ト云是也、本分ノ田地ヲウマ々々ト意得タルコソ、第一ノ功德ヨ、重論トハ、油断セイテ、請益ヲモセイト云義、又ハ、孝者ニカケテ、猶念比ニ示シテキカセイト云義アリ、一枕——、夢ノ覺タル寐也、夢中ニモ、清風カ吹ケハ、ヤカテ覺ル、ソレモ瞬息ノ中也、或云、清風ハ、夢中ノ樂ソト、一切衆生ハ、以苦為樂者チヤ、瞬息中ハ、目タ、キスル卒度ノ間ヲ云タ、百年遊樂モ、一瞬中ト也、中興詩云、客來驚起還鄉夢、繞屋松風綠樹寒、空劫——、空字、或作窮也、起世經云、八十由旬、城ニ所滿芥子、一年一尽、芥已尽為一大劫、詳于教也、劫ノ字モ參而可知、一字テスキト聞ヘタ、教者ハ、色々云タ、此頌ノ心ハ、窮劫ヨリ今日マテ、佛祖夢中ニ出世シテ、皆説レ夢タ者ヨト(20才)夢ヲ作タ、傳灯五卷、本淨禪師傳云、經云、凡所有相皆是虚妄、若見_レ諸相_レ非相_{ナリト}、即悟其道、若以相_レ為_レ實_ト、窮_ト劫_レ不_レ能_レ悟_レ道_ヲ、又、韶州法海禪師問六祖云、即心是佛、願垂指喻、祖云、前念不_レ生即心、後念不_レ滅_セ即佛、成_ニ一切_ノ相_レ即心、離_ニ一切_ノ相_レ即佛、吾若具説_ハ窮_テ劫_レ不_レ尽_キ、樓頭——、窮劫ヨリ佛祖イカホトノ鐘声ヲカ眷テ、夢ヲ覺タルラン、鐘ハ夢ヲ覺ス者ニテアルホトニ、夢ノ字モアリ、樓ハ本ヨリ宅ノ字、是モ一句ニ二字ヲ作タ、或抄云、佛祖ノ出

世スルハ、衆生煩惱夢覺サセン為也、其時ハ、鐘声ヲ佛祖ノ説法ニ云タ、其作者ノ本意ヲハ失タ、サノミ、ノキハセヌ、ケニモ佛祖出世シテ、一切衆生ヲ悟シメタハ、鐘声ノ夢ヲサマスカ如シ、喻チヤ、夢醒ヲハ、悟ノ境界ニ云タ、下炬拈香ナントニ、夢醒驚破ナント、云タハ、皆悟ノ上、有子細、夢ト云コトヲ參タラハ、可知、老宿云、夢宅ハ、三界無安、猶如火宅ノ文ヨリ出、老漢_佛云、積尊出世シタハ、此文ヲ為説ソ、只是ハ、垂手意也、參学ノメン々々心得ラレヨ、一期ハ夢中、生死不待人、急_ニ著_テ工夫_ヲ悟徹セヨ、幾鐘声ソト、孝者ニツ、カケテ(20ウ)問タソ、捨而孝者ヲハ、悟徹ノ境界ニ、イタラセフマテト、接スル者也、孝者モ、吾悟徹シタトハ、シルマイ、師家ヨリ看ル所アリ、今時皆悟徹モセイテ、悟徹シタト思_フ、元ヨリ古則ヲ多ク見タラハ、此外ハアルマイト思タハ、道理悟徹ノ境界ハ、可_レ離_ニ古則話頭_一也、皆理ノ上ヲ意得タルマテ、悟徹ノ境界ニイタリ得者ハ、一人テモアレ、アリカタイ、悟徹ノ境界ニ不_レ至、大用現前モセイテ、仏法シリタテハ、實_ニ以_レ可笑事チヤ、我ハナン則看タ、ナン則參タ、此古則ヲハ、人ハシルマイナント、云テ、名利名文能作ニシテ瞞スル、無勿体也、是ヲハ、子細ノ魔ト云事ヲ參タラハ、可知、佛モ説タ、末世ニハ悟タト云者ハ、如_レ麻如_レ粟ニアルヘシ、又三四句ノ一義ハ、三世諸佛、歷代祖師モ、トコニ今蹤跡カ残テアルソ、

鐘声ノ蹤跡ナキカコトシ、トコニ鐘ノ声カ残テアルソ、ツキ
マメハ、アトカタチモナイソ、

(10) △侍者皈隆興

隆興ハ、江西ノ地名、歸ノ字ヲ以テミレハ、此侍者ノ生縁
カ、隆興人歟。

霹靂声ノ中踊ル怒濤ニ、諸方ノ壑甕奈レ渠何、欄干十二滕王閣、
(21才) 暮雨朝雲愁恨多シラ、

此頌ハ、古注ヲ讀テハ、不レ耨トテ、注ヲアソハヌ也。
此侍者ハ、朋介石ノ會下テ、久參テアリタ歟。介石ノ佛
法ヲ參シヨセテ、我手裡ニアルト思テ、江西辺ノ知識ヲ
タ、キマハラントス。此故ニ拽ニ洛浦安禪師之機縁也。
洛浦安禪師久為林際侍者、濟常称美云、林際門下一隻箭、
誰敢當鋒。師一日辭濟、々問、甚麼処去。師云、南方去。
濟主丈畫一畫云、過得這箇便去。師乃喝。濟便打。師作
礼。濟明日上堂云、有一条赤梢鯉魚、搖頭擺尾向南北去。
不知向誰家壑甕裏淹殺云々。
霹靂ハ、喩喝、怒濤ハ、侍者ノ機用ヲ云タ。一隻ノ箭ト
ハ、美テ云タ。昔モサルタメシアリ。洛浦ヲ一隻箭ナン
ト、ホメタレトモ、腑カクサツテ、心得カ一ツチカワタ
ヤラウ、洞下ヘイタト云也。今ノ侍者モ、昔ノ様ナト、
躍怒濤トハ、指侍者而揚テ抑シタ。怒濤ハ、伍子胥魂化

為海神、毎年八月十六日、怒濤洪浪鼓壞吳地。諸方
壑甕ハ、コチノクキ桶也。(21ウ) 魚ヲ入ル、スシ桶チ
ヤ。林際ハ、安禪師ヲ淹殺セラレント云タ。是ハ、渠ヲ
如何ト云。諸方ノスシ桶モ、此魚ヲハナニトモエセマイ
ト云テ、底ハ抑下シタ。渠ノ字ハ、指侍者、諸方ノ知識
ヲ罵テ、侍者ヲホメタ。洛浦ハ、雲居寶覺禪師ノ會下ヘ
行トモアリ。夾山善會會下ヘ行トモアリ。何モ曹洞宗
チヤ。林際サハ、人ヲコソ見ソコナハレテアリ。サル程
ニ、人ヲ見ルコト、師家ノ一大事也。先師ノ沙汰ニモ、
涙ヲナカスホトノ志ヲ見イテハ。油断バシスナ。大事ノ
古則話頭ナントヲ、鼠骨ニ見スベカラス。新到ノ學者、
故人ナント、皆古則ヲモ不レ見サキニ、法器ナント、云。
是ハ、ナニト見タソ。定テ見ルヤウアルヘシ。故人モ云
タ、入門早弁来見解。又ハ、鑑在機前ソ。又ハ、淹殺
スト云タハ、一佛ノ湊河カアル。壑甕ノ内ニ、塩ヘシニ、
シラルヘシト、底心ニハ、ナニタル者ニカ、惑乱セラレ
ンスラフ。カハイ者ヤ。案ノコトク、洞下ヘイタ。古語
云、看子不如父、看弟子不如師、今皆孝者、面ヲカサル。
師家ヲスルホトノ者ハ、五臟六腑ヲ見ヌク者也。侍者ノ
機縁コソ多ケレ。洛浦ノ事ヲ取出シタハ、此侍者ヲ抑下
チヤ。捻而抑揚ト云コト、大事也。禪僧(22才)ノ翫フ
事ソ。禪僧ト云者ハ、悟徹透徹シタレトモ、機関ヲフル

マハネハ、禪僧ニアラス。イカニ又機関ヲ振舞トモ、一起一倒ノ処ヲシラ子ハ、禪僧ニアラス。イカニ一起一倒ヲ心得タリトモ、抑揚ノ処ヲシラスハ、禪僧テハアルマイ。サテコソ、全備ノ僧マレ也。此類悉皆抑揚アリ。欄干——、向_レ侍者云、面白名処ヲ行テ見ン。滕王ノ作ラレタ、結構十二欄干アラン。行ク先ヲ送行ニ作タ。

△唐ノ高祖ノ太子滕王、字元嬰、於隆興府造高閣、謂之滕王閣。暮雨——、王勃賦云、珠簾暮捲西山雨(此句ハ下ニアルヘシ)、畫棟朝飛南浦雲。ソレヲ看サシマウフタラハ、数々ノ愁恨カ、触_レ物_ニ起ラン心得ヨ。多カランノ点ノ時ハ、アチヘ行テ悟タラハ、思ワウスル事ハ、此會下ニハタラカサイテユウスル者ヲ、用ニモナイ。諸方_ヲ草鞋錢ヲツイヤイテ、隙ヲイレタト後悔シテ、愁恨出コンスラント、此侍者ヲ留ル意カ、辞_ニアラワレタ。參禪僧ハ、一志、二堪忍、三利根、此内テ堪忍_カ肝要ソ。

老宿云、或抄ニ、渠字、壺甕ヲ云、霹靂ハ、師家ヲサスナント、アリ。是ハ、非ナリ。第一二句、介石心ナルヘクハ、當年林際、今日介石、昔日洛浦、今日侍者、昔サヘ如是更事アリ、況ヤ今時ヲヤト、深ク侍者ニ示心アツテ面白シ。洛浦_ハ、執侍巾餅二十年ト作タ。昔_{コト}ヲ云テ、今ヲ云タ。又云、渠_ヲ如何トハ、落_テ云タ。(22ウ)カハイ、ト云義。第三四句ハ、送_レ侍者_一時節也。自_レ朝至_{マテ}暮_ニ話_レ別_レ

ホトニ、コトサラ雨フリテ、一トシホ、此侍者ニナコリカ惜イ。愁恨ハ、離愁別恨、雨ニ因テ感起ル者也。故人詩云、今國多年情尽改、忽聽春雨憶江南トツクラヌカ。此侍者、洛浦ノ安ノ様ニ振舞タハ、遺恨千万チヤ。アハレト思イト、マレカシト響タ。此侍者志ノ人ナラハ、御意忝イトテ、思_レ留_ン。只送行頌ハカリ把而飯_ニ隆興_ニタカ。又云、多ラントノ点ノ時ハ、マツト堪忍シテ、參禪ヲモト、ケイテ、治定後悔セント、暮雨朝雲ニ有_レ恨ト也。又義ハ、此侍者ハ悟テアルホトニ、昔ハ暮雨朝雲ニ被_レ惑_セテアルカ、今皈_ニタラハ、暮雨朝雲ノ惑ヲハウケマイト、実ニ悟タラハ、被_ニ境惑_ニマシイソ。其時_ノ点ハ、多カランヤト、ヲ、シノ点ノ時ハ、暮雨朝雲ニ、猶恨カ可_レ増也。今古雨中ニハ、感慨多_キ者也。